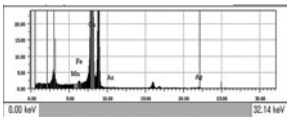
木村定三コレクション「金属工芸」調査報告目録

（作品解説）

京都国立博物館名誉館員　久　保　智　康

ほか（p. 156凡例参照）

密教法具



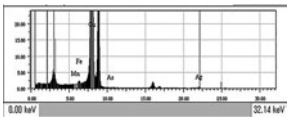
1　銅独鈷杵（どうとっこしょ）

平安時代　12世紀か
1口　銅鋳造
全長20.7　把長6.4　鬼目部径2.5　鬼目径0.85
M951（独鈷杵）

鈷は長く先が尖り、四面に匙面をとる。単弁八葉の蓮葩を三条帯で約す。括れは強い。蕊はやや細かな刻線で表す。鬼目は大きく飛び出る。重瞼でやや横長。表面の所々に撫で痕を認める。No.2も同様。蠟型原型の調整痕か。地金が黒味を帯び、表面が銀灰色に見える。No.2の分析結果から銀銅合金と判明。全体に薄く緑青を発生し一部に土が付着する（鋳物土か）。

主要検出元素：銅

他の検出元素：銀、ヒ素



2　銅独鈷杵（どうとっこしょ）

平安時代　12世紀か
1口　銅鋳造
全長20.7　把長6.4　鬼目部径2.4　鬼目径1.0
M954-1（銀製独鈷杵）

No.1と同工同作。検出元素も同じ。緑青は少ない。

3　銅独鈷杵（どうとっこしょ）

鎌倉時代　13世紀
1口　銅鋳造
全長13.9　把長4.9　鬼目部径1.7　鬼目長径0.6
M946-2（銅独鈷杵）

全体に暗緑色を呈し、出土品とみられる。鈷は細長く、先をわずかに尖らせるか。把は単弁八葉の蓮蕾を二条帯で約すが、括れはNo.9の五鈷杵よりゆるい。蘂はごく細かく表し、蘂頭を魚々子鏨を打ち連ねて表現する。

4　金銅独鈷杵（こんどうとっこしょ）

南北朝時代　14世紀
1口　銅鋳造
全長32.8　把長11.4　鬼目部径4.0　鬼目幅1.95
鬼目高1.9
M955（金銅独鈷杵）

大型の鬼面独鈷杵。一方の鈷先が火中するか。火中側の約条中央寄りを境に分割鋳造か。鈷先は尖り、四面は匙面をゆるくとる。把は鎬立った素弁八弁（間弁付き）の蓮蕾を二条帯で約す。火中側の二条帯に正円形のスを認める。蘂は長い刻線で表し、先端近くに沈線を巡らして蘂頭を表現する。鬼目は口を閉じ､左右に食いしばる形の鬼面。各々の鬼面の表情はほぼ同じ。全体の彫りのタッチが甘い。蠟型鋳造の可能性あり。仕上げに研磨を施すか。地金はやや白っぽい銅色。表面に黒漆を残す。

5　金銅独鈷杵（こんどうとっこしょ）

江戸時代　18-19世紀
1口　銅鋳造
全長20.6　把長6.8　鬼目部径2.7
鬼目長径（瞼外）1.15
M954-2（金銅独鈷杵）

分析によると純銅に近く、鍍金の水銀は検出されない。把と鈷は別鋳し､鑞付けか。鈷先は尖り、先端にごくわずかに平坦面を持つ。鈷の四面は匙面をとる。把は外側が幅広の四弁（間弁付き）、内側が幅背間の八弁（間弁付き）の蓮蕾を子持ち三条帯（外側帯が高い）で約す。蓮蕾は緩やかに鎬立てた筋弁。蘂は近世風のやや深い等間隔の刻み。鬼目は横長で高く飛び出る。重瞼。地金は茶色。薄く緑青を生ずる。鍍金はやや赤味を帯びる。

主要検出元素：銅

他の検出元素：金

6　金銅独鈷杵（こんどうとっこしょ）

江戸時代18-19世紀
1口　真鍮鋳造　鍍金
全長6.4　把長5.3　鬼目部径1.5
M953（金銅独鈷杵）

断面六角形の先を尖らせた鈷を有する独鈷杵。鈷の根元に太い隆帯を巡らす。鬼目は扁平で単瞼。蓮弁は素弁六葉の蓮弁を二条の隆帯で約す（断面は六角形）。蕊はごく細かく表す。蛍光X線分析により、銅・鉛に亜鉛を含む真鍮で、ヒ素を一定量含み鍍金を施したと確認された。

主要検出元素：銅、亜鉛
他の検出元素：ヒ素、金、鉛

7　銅三鈷杵（どうさんこしょ）

奈良～平安時代　8-9世紀
1口　銅鋳造
全長21.9　把長（隆帯端）7.2
鈷幅（逆嘴端）7.1・6.5　把中央長径1.2
M949（銅三鈷杵）

脇鈷が大きく逆嘴形となる古密教の三鈷杵。中鈷は逆嘴を造らず菱形を呈する。把は断面が不整形の八角形を呈し、中程が膨らみを持つ。把の両端を二条隆帯で画す。蛍光X線分析で錫とヒ素を検出。全体が黒味を帯びる。

主要検出元素：銅
他の検出元素：スズ、ヒ素

8　金銅三鈷杵（こんどうさんこしょ）

平安時代　12世紀
1口　銅鋳造
鍍金
全長16.2　把長6.1　鈷張4.8　鬼目部径1.95
鬼目径1.1
M950（金銅三鈷杵）

脇鈷が強く張り、中鈷の四面はわずかに匙面をとる。把は単弁八葉の蓮蕾を二条帯で約す。括れは強い。蕊はやや細かな条線で表し、蕊頭は表現しない。鬼目は大きな円形で、出が強く、重瞼。膨らみは大きい。鍍金はやや赤味が強い。

9　銅五鈷杵（どうごこしょ）

平安～鎌倉時代　12-13世紀
1口　銅鋳造
全長14.8　把長5.1　鈷張3.8　鬼目部径1.9
鬼目長径0.8
M946-1（銅五鈷杵）

脇鈷がなだらかに広がり、中鈷は四面を平板に造る。把は単弁八葉の蓮葩を二条帯で約す。括れは強い。蓮弁は子葉を強調し、立体的に表現する。蘂は細かい線刻で表すが、蘂頭は省略。鬼目は重瞼で横長。全体に暗緑色を呈し、土や鉄分も付着し、出土品とみられる。

箱蓋表に「金峯山／獨鈷／五鈷」「弐個」と墨書

10　金銅割五鈷杵（こんどうわりごこしょ）

江戸時代　17-18世紀
1口　真鍮鋳造
全長19.0　把長6.6　鈷張5.9　鬼目部径2.7
猪目幅0.3
M944（金銀鍍割五鈷杵　付舎利）

地金が黄味を帯びる。請来様の割五鈷杵。分割した一方の把の括れより先を別鋳し、鑞付けする。脇鈷は火焔を表すも、張りは本歌より著しく弱い。中鈷は各面を匙面八角錐形で、先端を断ち切ったように面をとる。根本には三条帯を巡らす。把は素弁八弁の蓮葩を三条帯で約す。断面は八角形。蘂は極めて細かく彫り表す。蘂頭は極小粒な連珠文帯と化す。鬼目は十六面切子形。各面に猪目形鬼目を凹ませる表現。分割した一方の股に別材で噛み合わせのためのハバキを設け、一方の股は本体に鋳造後刳り込みを設ける。一方の鈷基部内面に径6.5mm、深さ6.0mmの円形舎利孔をあける。舎利はわずかに緑青を生じ、銅製と思われる。（長径6.1mm、短径5.4mm）

主要検出元素：銅、亜鉛
他の検出元素：金、鉛

11　金銅五鈷杵（こんどうごこしょ）

江戸時代　18-19世紀
1口　銅鋳造　鍍金
全長24.1　把長8.0　鈷張7.6　鬼目部径3.7
鬼目長径2.3
M948（金銅五鈷杵）

別鋳の鈷部と把部を組み合わせた大型五鈷杵。脇鈷はやや強く張り出し、逆嘴を尖らせる。中鈷は四面ともに平板となる。把は筋弁の八葉蓮蕾を別造りの撚紐状約条二条で約す。藥頭は外側に強く張り出し､藥文帯は精緻な連珠文（中央が凹む。特殊鏨によるか）になる。鬼目は四重瞼で横長。出は低い。

12　金銅宝珠杵（こんどうほうじゅしょ）

鎌倉時代　13-14世紀
1口　銅鋳造　鍍金
全長14.5　把長5.1　火焔幅4.1　鬼目部径1.8
鬼目長径0.7
M956-1（金銅宝珠杵）

両端に四方火焔と三面宝珠をかたどった宝珠杵。火焔や宝珠の二線は太い毛彫で表す。把は単弁八弁（間弁付き）の蓮蕾を二条帯で約す。蓮蕾は先が尖り緩やかに鎬立てる。藥はごく細かな刻線で表し、魚々子鏨を打ち連ねて藥頭を表す。鬼目は小さく、ごく平で出は弱い。

左No.12　　右No.13

箱蓋表に「鎌倉／鍍金／鍍銀／寶珠鈷／仁和寺傳來」

13　銅鍍銀宝珠杵（どうとぎんほうじゅしょ）

室町時代　15-16世紀
1口　銅鋳造　鍍銀
全長14.3　把長5.2　火焔幅4.0　鬼目部径1.7
鬼目長径0.7
M956-2（鍍銀宝珠杵）

両端に四方火焔と三面宝珠をかたどった宝珠杵。No.12の写し。火焔や宝珠の二線は粗い毛彫で表す。把は単弁八弁（間弁付き）の蓮蕾を二条帯で約す。蓮蕾は先が尖るが鎬立てない。藥はごく細かな刻線で表し、外側に粗い小刻み帯で藥頭を表す。鬼目はNo.12より短径が大きく瞳は円形。出は弱い。鍍銀は金色を帯びる。

14　金銅宝珠杵（こんどうほうじゅしょ）

南北朝時代　14世紀
1口　銅鋳造　鍍金
全長16.9　把長5.9　宝珠高1.7　1.9
鬼目部径1.9　鬼目長径0.9
M952-2（鍍金宝珠形独鈷杵）

鈷の両端に蓮台・三面火焔宝珠を造り出した独鈷杵。把は、重弁八葉の蓮葩（鏑を立てる）を二条帯で約す。括れは弱い。断面は円形。藥は細かな刻線で表し、藥頭は連珠文化する。鬼目は小さく二重瞼で横長。出はやや高い。地金は黒味を帯びる。

箱蓋表に「醍醐寺傳來／渡金／独鈷寄鑓鉾／寶珠形」貼紙

15　金銅五鈷鈴（こんどうごこれい）

平安時代　12世紀
1口　銅鋳造　鍍金
全高18.6　把長10.3　鈴身高8.3　鈷張4.9
鬼目部径2.4　鬼目長径1.2　口径7.9
M965（金銅五鈷鈴）

鈴身が裾広がりになる五鈷鈴。中鈷はやや細長く造り、脇鈷の張りは穏やかで逆嘴も柔らかい。把は幅広の素弁八弁（間弁付き）の蓮葩を子持ち三条帯で約す。鏑は手擦れでほとんど見えない。藥は細かな刻線と魚々鼗で写実的に表す。鬼目は円形に近い楕円形で重瞼。出はやや高い。鈴身の頂は肩の蓮弁を子持ち三条帯で約すように造る。鈴身はやや肩が張り、下方に直線的に広がり口縁付近で強く開く。肩に子持ち三条帯。その直下と裾付近に四条一組の沈線を三組巡らす。口縁の内側に法をつける。口縁下面は内側へやや傾斜を持つ。

16　金銅五鈷鈴（こんどうごこれい）

平安～鎌倉時代　12世紀
1口　銅鋳造　鍍金
総高16.3　身高7.5　鈷張4.6　鬼目部径2.15
鬼目長径0.9　口径7.1
M959（金銅五鈷鈴）

把と鈴身を別鋳。脇鈷がやや強く張り、中鈷の先は丸みを帯びる。逆刺は緩やかに飛び出る。把は単弁八弁の蓮蕾を二条帯で約す。括れはやや弱い。鬼目部は比較的大きく膨らむ。鬼目は横楕円形の重瞼で小さく飛び出る。鈴身は口縁近くで緩やかに広がる。肩に単弁八弁の蓮弁を飾る（間弁付き）。蓮弁は柔らかく鏨を取る。蕊はごく細かな珠文をめぐらし蕊頭とする。鈴身側面に子持ち三条帯を三条めぐらす。唇はやや厚い。鈴身の地はやや黄味を帯びた響銅質。全面に黒漆を塗り、鍍金が一部露出する。

中箱に広瀬都巽の「五鈷鈴拝記」あり

17　金銅五鈷鈴（こんどうごこれい）

南北朝～室町時代　14-15世紀
1口　銅鋳造　鍍金
総高18.5　身高8.3　鈷張4.3　鬼目部径2.3
鬼目部長径1.2　口径7.8
M962（金銅五鈷鈴）

把と鈴身を別鋳する五鈷鈴。鈷張りが弱く脇鈷と中鈷が接する形で鋳造される。鬼目部の膨らみは弱く、鬼目はやや横長の楕円形で二重瞼。鬼目部を挟み単弁八弁の蓮蕾（重弁、間弁付き）を飾る。蓮蕾の約条は連珠文を表し、括れはゆるい。蘂を細かな短刻線を表し、連珠文で蘂頭を表す。把下端の柄を鈴身頂に差し、柄にあけた二孔のうち下の孔に現状では舌を下げる。鈴身は胴の張りが強い量感のある形態。肩に八弁蓮弁（重弁）をめぐらす。ごく細かな刻線で蘂を表し、連珠文で蘂頭を表す。肩に一条、子持ち三条、二条の隆帯、胴下半に二条、子持ち三条、二条の隆帯を表す。口縁の唇は薄く、子持ち三条形に表す。蛍光X線分析の結果、鈴身のほうが錫の含有率が高い。ただし色味はいずれも黒味のやや強い暗茶色。鍍金も赤味が強い。鈴の器胎厚く、重量がある。

18　金銅明王五鈷鈴（こんどうみょうおうごこれい）

鎌倉～南北朝時代　14-15世紀か
1口　銅鋳造　鍍金
総高19.9　身高7.8　鈷張6.3　鬼目部径3.1
鬼面幅1.5　口径7.6
M960（金銅五鈷明王鈴）

把と鈴身を別鋳。脇鈷が半円形に近い張りを見せ、外側に雲形を表し、基部に鬼面を彫り表す。中鈷は先が尖り、側面に隆線を二条表す。把は四方に鬼面を大きく表し、上下に単弁八弁蓮華文（二重弁、間弁付き）を表す。上半の蓮弁を形式化した子持ち三条帯で約す。蓮蕾の上端と鬼面の上下に刻線により藁を表す。鈴身は把に比して丈が低く、胴張りが強い。側面に三明王と独鈷杵を交互にごく高肉に鋳出する。所々明王を鈴身に貼り付けたように見える箇所があり、蠟型鋳造によったものか。側面上下に隆帯で挟んだ連珠文帯をめぐらす。肩に単弁八弁蓮弁（重弁、間弁付き）を表す。子弁は膨らむ。藁は刻線により細かく表すも、藁頭は表現しない。口縁は短く開き、唇がごく薄い。地は暗茶色（山金か）。蛍光X線分析により、純銅に近いことが判明。側面の地に細かい打痕が残る。

19　金銅宝塔鈴（こんどうほうとうれい）

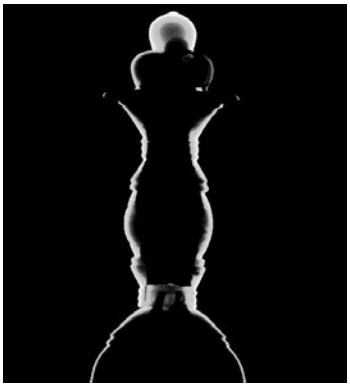
鎌倉時代　13-14世紀
1口　銅鋳造　鍍金
総高18.1　本体高（像を除く）11.3　身高7.5
鬼目部径2.4　口径7.0
M963（金銅弥勒菩薩鈴）

把と鈴身が一鋳で、宝塔を欠き、座に檀像の弥勒菩薩坐像を安ずる宝塔鈴。弥勒像の掌上の五輪塔は別材で造る。把の中央に球形に膨らむ鬼目部を設けるが、鬼目は表さない。蓮蕾表現も省略し素文とする。上方に向かって朝顔形に広がる。把の括れ部には一条の隆帯で約す。鈴身は肩がやや肩衝き形に近く、ごくゆるやかな膨らみを持ちつつ下方に広がる。口縁近くで強く外反し、玉縁状の唇を造り出す。肩に一条の隆帯をめぐらす。側面に四条の隆帯をめぐらすが、仕上げはいたって粗雑。随所に細かなスを認める。地は黒味の強い暗茶色で、やや白味のある鍍金を施す。

20　金銅宝珠鈴（こんどうほうじゅれい）

鎌倉時代　13-14世紀
1口　銅鋳造　鍍金
総高20.0　身高8.8　鬼目部径3.4　鬼目長1.7
口径6.4
M961（金銅宝珠鈴）

把上に宝珠を一＋四個盛る宝珠鈴。火焔を欠失。座の四方にある円孔は火焔の柄を留めたものか。把は縦長の鬼目八個からなる鬼目部の上下を蓮蕾で飾る。蓮弁は単弁八弁（間弁付き）で鏑を立てる。子弁を刻線で縁取る。蓮蕾を約す子持ち三条帯の中央帯に魚々子鏨で蓮子を表す。藁は細かな短刻線。ＣＴ観察によると把が鈴身上端の柄にかぶる構造で、90度方向に二箇所見えるピンは両者を固定したものか。鈴身は撫肩でゆるやかに下方に広がる。口縁下面は幅0.35㎝と薄く、匙面を取る。ＣＴ撮影によると宝珠中程から鬼目下端近くまで二又の細長いピンが存在する。中子の軸か。



CTスキャナー画像
撮影　九州国立博物館　鳥越利行

21　金銅三昧耶五鈷鈴（こんどうさまやごこれい）

鎌倉時代　13世紀か
1口　銅鋳造　鍍金
総高21.9　身高9.3　鈷張7.0　鬼目部径3.8
鬼面幅1.9　口径8.7
M964（金銅五鈷三昧耶鈴）

把と鈴身を一鋳とし、鈴身に三昧耶形を表した五鈷鈴。鈷張りはやや強く、外側に雲形を表す。基部に鬼面形を彫り表す。中鈷は中央の隆帯を表し、左右を弱い匙面とする。把中央の鬼目部は大きく膨らみ､鬼面四方に大型の鬼面を高肉に表す。その上下に単弁八弁（間弁付き）の蓮把をめぐらす。子弁の中にさらに小さい子弁を太い毛彫りで表す。括れを二条隆帯で約す。藥は短刻線で表し、魚々子鏨を打ち連ねて藥頭を表す。鈴身は強く肩が張り、わずかに外方へ向かって広がり、口縁近くでさらに広がる。肩に単弁八弁の蓮弁（間弁付き）を表す。肩に一条の隆帯、側面に二条の連珠文帯、口縁近くに一条の隆帯をめぐらし、各々の間に独鈷杵、三昧耶形、三鈷杵を薄肉に鋳出する。口縁は唇を薄く造り、子持ち三条帯をめぐらす。口縁下面は全くに水平で面取りもなく、内面に立ち上がる。地はわずかに鶯色がかった暗茶色。鍍金はやや白味がかる。

22　銅八鈷鈴（どうはちこれい）

江戸時代　18-19世紀
1口　真鍮鋳造
総高19.0　身高7.8　把長11.2　鈷張5.0
鬼目部径2.0　口径8.1
M957（銅九鈷鈴）

中鈷と八本の脇鈷を連接する八鈷鈴。把は細長い八面切子形で蓮弁を表さず、くびれを二本の隆帯でしばる。鬼目も個別には表さず、膨らみを持った隆帯になる。柄と鈴芯は一鋳。鈴芯はゆるやかに裾広がりになり、分厚く角張った口縁をめぐらす。肩と胴に三条の略小持ち三条帯をめぐらし、下二条の間にやや細い隆帯を二条めぐらす。中に真鍮製の舌を下げる。総体に黒褐色を呈する。

23　銅三鈷鈴（どうさんこれい）

桃山～江戸時代　17世紀
1口　真鍮鋳造
全高19.6　把長10.7　鈴身高8.9　鈷張5.0
鬼目部長径2.75　鬼目長径1.3　口径9.2
M966（銅三鈷杵）

把と鈴身を別鋳し、枘組みする。中鈷は中央にゆるく鎬を立て、匙面をとる。脇鈷は張り弱く、ゆるやかに立ち上がる。把は筋弁八弁（間弁付き）の蓮蕾を二条帯で扼す。鬼目は横長で二重瞼。出はやや高い。鈴身は肩が張り、ほぼ垂直に立ち上がって、口縁近くで急に広がる。鈴身の頂部を二条帯で表す。肩に筋弁八弁（間弁付き）蓮蕾をめぐらす。蕊は細かく刻線で表し、蕊頭は完全に連珠文化する。肩から胴部にかけ二条帯で二区に分け、各々に魚々地牡丹唐草を二単位、毛彫りで表す。鈴身の下寄り、二条帯と口縁の間には複弁八弁（間弁付き）の形式化した蓮弁をめぐらす。内面は真鍮の地金色がよく残る。

主要検出元素：銅、亜鉛
他の検出元素：鉛

24　五鈷鈴（ごこれい）

江戸時代　17-18世紀
1口　銅鋳造
総高13.9　鈴身高6.0　口径5.6
M1146-3

胴に三条の隆帯。肩の蓮弁は蕨手に変化する。柄は木製。

25　五鈷鈴（ごこれい）

江戸時代　17-18世紀
1口　銅鋳造
総高12.4　鈴身高6.2　口径5.5
M1146-2

錫を多く含み白色を呈する。胴に二条の隆帯をめぐらす。肩の蓮弁は単弁。柄は木製。

松虫
M1146-4

鈴虫
M1146-5

26 五鈷鈴（ごこれい）

桃山～江戸時代　16-17世紀
２口１具　銅鋳造
左：総高14.8　鈴身高6.0　口径5.8
右：総高14.0　鈴身高5.8　口径5.13

No.24よりやや鉛を多く含むも鈍い白色を呈する。左（松虫）よりも右（鈴虫）の方が音程が高い。左の蓮弁は重弁。右の蓮弁は単弁いずれも柄は木製。左は14世紀。右は15-19世紀の形を呈する。

27 銅三鈷鐃（どうさんこにょう）

平安時代　11-12世紀
1口　銅鋳造
全長31.6　把長19.4　鈴幅8.6　鈷張9.8
M967（黄銅三鈷鐃）

把と鈴を別鋳し、把で留める。鈴は茄子形で肩に素弁の蓮弁を大きく表す（内面に蓮弁の輪郭形がわずかに観察される）。口はほぼ半周開き、やや薄手の唇をめぐらす。中に球形の石製錘。把は三鈷柄形で、脇鈷に逆嘴を二段表すも、表現は柔らかい。中鈷は先が丸味を帯びる。分析の結果、鈴が純銅に近い地金で、把は真鍮製と判明し、把のみ近世に下る可能性もある。

鈴の部分

主要検出元素：銅

他の検出元素：銀、鉛

把の部分

主要検出元素：銅、亜鉛

他の検出元素：鉛

箱蓋「二月堂御水取／黄銅三鈷鐃」墨書貼紙

28 蓮台（れんだい）

江戸時代　18-19世紀
1口　真鍮鋳造
径7.5　高10.1
M1146-1（蓮台）

複弁八弁の蓮弁をめぐらした蓮華形の台。蓮肉は素文で凹面鏡状になり中心に刻点一個を打つ。蕊は頭を二段に連ねる。蓮弁は鋳放し。側面に縦方向に鑢を入れる。無垢で重量がある。

29 金銅金剛盤（こんどうこんごうばん）

平安時代　12世紀
1基　銅鋳造　鍍金
幅21.1　奥行13.9　高2.5　縁高0.4
M969（金剛盤）

四葉形の薄手の金剛盤。外周は断面三角形に縁取りし、その内側にわずかに段を設ける。後方に大きな括りを入れ猪目形とするが、透かしは円形となる。三脚は横断面六角形で背面上半を刳る古様な形を呈する。山金色の鋲でかしめ留める。

30 銅金剛盤（どうこんごうばん）

江戸時代　17-18世紀
1基　銅鋳造
幅24.6　奥行18.2　高4.0　縁高0.7
M970-1（金剛盤）

四葉形の各々が肩の張った形になる金剛盤。猪目は透かさない。縁は高い断面三角形で内側に沿って沈線をめぐらすも段はつけない。三脚は背面を機械的に刳った形で角張る。本体と鑞付けする。全体が漆黒色を呈する。

主要検出元素：銅

他の検出元素：ヒ素、鉛

31 銅金剛盤（どうこんごうばん）

江戸時代　17-18世紀
1基　銅鋳造
幅27.2　奥行21.6　高5.2　縁高1.0
M970-2

前後が近い形の四葉形に造る金剛盤。猪目は透かさない。縁は高い断面三角形で内側に沿って沈線をめぐらし、極細かな蕨を表す。鈴を置く位置に輪法、左右に羯磨を丁寧に蹴彫りする。脚は角が高く角張る。本体上面で脚の枘をかしめ留める。全体に黒色を呈する。

主要検出元素：銅

他の検出元素：ヒ素、鉛

32 金銅六器（こんどうろっき）

江戸時代　18-19世紀
6組1具　真鍮鋳造　鍍金
六器：口径8.4　高台径4.2　高3.6
六器台：口径8.2　内区径3.7　高台径5.6　高1.4
M977（鍍金六器）

【六器】高さが低く、古い器形を踏襲した蓮弁飾り付きの六器と六器台。椀は口縁と高台が強く反る。体部のやや上寄りに子持ち三条の隆帯をめぐらす。以下に素弁八葉（間弁付）と蕨をめぐらす。各弁には三条の弁脈を線刻。外底はいたって丁寧に研磨する。外底含む全面に鍍金。

【六器台】鍔の端を上方に肥厚させる。六器の座は山なりの隆帯をめぐらす。外底のみ鍍金を省略。細かな轆轤削り痕を残す。蛍光X線分析により、銅鉛合金の真鍮に鍍金を施していることが確認された。

主要検出元素：銅、亜鉛

他の検出元素：金

33 六器（ろっき）

江戸時代　18-19世紀
１組　真鍮鋳造
六器：口径6.7　高3.4　高台径3.4
六器台：鍔径7.2　座径3.3　高台径5.0
M2319（六器（うち一器のみ））

椀・台一組で二重弁の蓮弁をめぐらせた六器。椀は袴腰で江戸時代の形ながら、台は低平な古い形。蕨は粗い表現で蓮弁の彫り出しも甘い。外底の轆轤目はわずかに残す。

34　金銅灑水器（こんどうしゃすいき）

蓋：江戸時代　17-18世紀
鋺・台：南北朝～室町時代　14-15世紀
１組
蓋：真鍮鋳造　鍍金
鋺・台：銅鋳造　鍍金
蓋：口径9.3　高4.0
鋺：口径8.7　高4.2　高台径3.9
台：鍔径8.8　高1.6　座径3.5
M2249（金銅灑水器）

椀・台一組の六器に後補の蓋を組み合わせた灑水器。椀・台は二重弁の蓮弁をめぐらす。台の蕊は捩じる表現で　間地に細かな魚々子を打つ。外底はいずれも丁寧に研磨する。蓋は縁に幅広の複弁蓮華文を表す。つまみは未敷蓮華形で、座ともに筋弁。

35　金銅金錍（こんどうこんぺい）

鎌倉時代　13-14世紀
1口　銅鋳造　鍍金
全長15.8　把長10.1　鬼目部径1.2
鬼目径0.5
M952-1（鍍金独鈷杵）

八角柱形の鈷の両端に宝珠形を表す。把は単弁八葉の蓮蕾（鏑を立てる）を二条の隆帯で約す。括れはごく弱く、断面は八角形。蕊はごく細かな刻線で表す。蕊頭は表さない。鬼目は重瞼で小さく横長、出も小さい。地金は黒味を帯び、鍍金はやや青味を帯びる。

36　金銅四橛（こんどうしけつ）

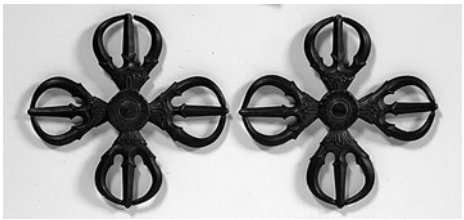
鎌倉時代　13世紀
1具　銅鋳造　鍍金
総長35.1　本体長29.0　鬼目部径2.35
鬼目長径1.1
M975（鍍金四橛）

断面八角形の四橛。鈷先に蓮台宝珠を造り出す。鬼目はやや大きく膨らみ、横長で二重瞼。鬼目を挟む蓮蕾は二重弁の単弁四葉（間弁付き）で鏑立たせる。締りはやや弱く二条帯で約す。蕊は頭を魚々子鏨で細かく表し、下方を密な細線で表す。基部は複弁四弁で膨らみ豊かに表す。下面にごく薄い銅板のソケットを鑞付けし、鉄柄を差し込む。一本のみ銅板を巻いて柄とする。

37　金銅橛形独鈷杵（こんどうけつがたとっこしょ）

鎌倉時代　14世紀
1口　銅鋳造　鍍金
総長31.2　柄長17.1　鬼目長径1.1
M2314（鍍金独鈷）

橛の柄に当たる部分を鈷先とした独鈷杵。鬼目は重瞼でやや横長。蓮蕾は鏑を立てた単弁。蕊は丁寧に表す。約条は二条で断面八角形。



38　金銅羯磨（こんどうかつま）

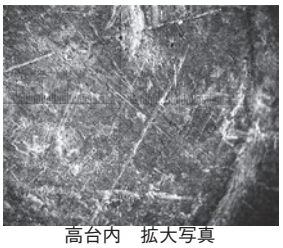
南北朝時代　14世紀
2口　銅鋳造　鍍金
長径11.1　短径10.8
鬼目部径2.3　厚（鬼目）0.75　鈷張4.0
M932（金銅羯磨）

鈷の根元の蓮蕾が強く締まり、脇鈷が強く張る古様な形の羯磨。中鈷と脇鈷は付いた状態で鋳造される。蓮弁は先が尖り、細長い子弁を粗く彫り表す。鬼目周囲の花弁は刻線のみで平板に表す。地がわずかに黄味を帯びるか。一方の一口は鬼目部脇鈷が斜めにずれて見える。古い羯磨をもとに型起こしをしたか。

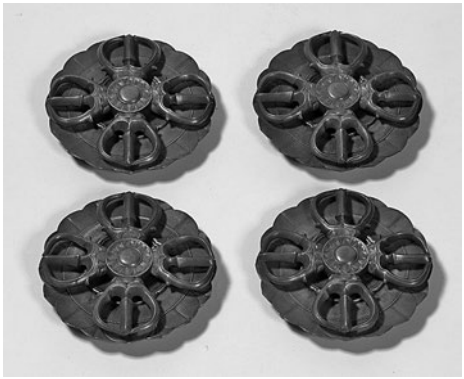
39　金銅輪羯台（こんどうりんかつだい）

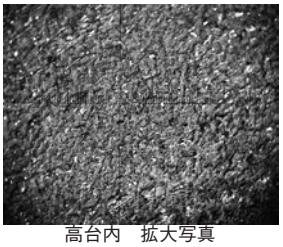
南北朝～室町時代　14-15世紀
1口　銅鋳造　鍍金
径13.5　座径5.2　高台径7.7　高1.5
M937（金銅輪台）

鍔を十二葉の蓮華形とする。弁の外周と中央に沈線を表すが、弁自体は柔らかく膨らみをもたせる。内側には長い蘂をめぐらすが、表現は粗い。高台内に轆轤削り痕を残す。座内側以外の全面に黒漆を塗る。



高台内　拡大写真





高台内　拡大写真

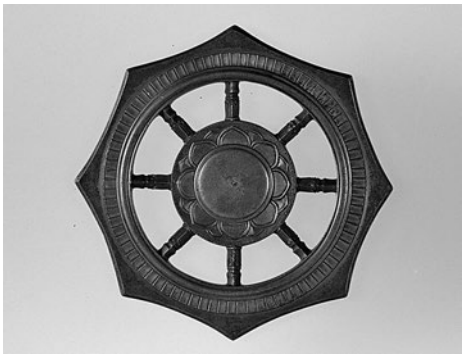
40　銅羯磨台（どうかつまだい）

江戸時代　17-18世紀
4口　銅鋳造
羯磨：径13.9　鬼目3.7　鈷張5.3
羯磨台：蓮弁径14.3　内区7.0　広大径10.1
高2.2
M933（白銅羯磨および台皿）

【羯磨】脇鈷が先で力強く張った羯磨。脇鈷と中鈷がつく。根元の蓮弁は羯磨台と同様の精緻な筋弁。鬼目は扁平に膨らみ、単弁八葉の蓮弁をめぐらす。

【羯磨台】細かな筋弁を八葉めぐらし間弁も大きく表した羯磨台。中央に八窠形の内区に蓮子を一＋八個鏨で打ち込む。その外側に波形の蕊を表現する。外底はいたって丁寧で平滑な仕上げ。線刻はすべて太い毛彫りで、やや機械的な印象を受けるほど精緻に行う。色身。蛍光X線分析の結果、銅に錫と若干のヒ素が入っていた。

主要検出元素：銅
他の検出元素：スズ、ヒ素



41　金銅輪宝（こんどうりんぽう）

鎌倉～南北朝時代　14世紀か
1口　銅鋳造　鍍金
径13.0　轂径5.2　厚(中心)0.8
M939（金銅輪宝）

八角形の輪宝。輪の内側は子持ち三条帯とし、その外側を小刻みとするが、長方形化している。大型の轂には幅広の単弁八葉蓮華文（間弁付き）を表す。蕊はきわめて細かく彫り表す。輻には二重弁の単弁蓮華文を精細に彫り表す。地は黒味の強い暗茶色。鍍金の残りがよい。

42　金銅輪宝（こんどうりんぽう）

鎌倉～南北朝時代　14世紀
1口　銅鋳造　鍍金
径11.8　轂径4.6　厚(中心)0.7
M940（金銅輪宝）

八角形の輪宝。輪の内側に幅広の子持ち三条帯をめぐらす。轂は単弁八葉蓮華文（間弁付き）を表す。弁の根元中央に短刻線。弁は柔らかな膨らみを持つ。輻は内外両側に簡略な蓮弁を表し、その間は球状に膨らむ。

43　金銅輪宝（こんどうりんぽう）

室町時代　16世紀
1口　銅鋳造　鍍金
径9.8　轂径3.1　厚(中心)1.3
M938（金銅輪宝）

八角形の輪宝。輪の内側に細い二条隆帯をめぐらし、その外側に長短交互に放射状の直線をめぐらす。轂は八角形。小刻み座をめぐらす。輻はごく短く、中央を膨らませ、稜を取る。

44　白銅輪法（はくどうりんぽう）および台（だい）

江戸時代　17-18世紀
1組　銅鋳造
【輪宝】径14.5　轂径3.9　厚1.6
【輪宝台】蓮弁径14.7　内区径7.3　高1.9
M935（白銅輪宝および台皿）

【輪宝】八角形の輪宝。轂は扁平に膨らむ鬼目の周囲に単弁八葉の蓮弁をめぐらす（M933の羯磨と同工）。輪の内側を一本の毛彫り線で縁取る。内寄りに大粒の連珠と小弁をめぐらす。輻は独鈷杵形。根元に精緻な筋弁を表す。

【輪宝台】細かな筋弁を八葉めぐらし間弁も大きく表した輪宝台。中央に八葉形の内区に蓮子を一＋八個鏨で打ち込む。その外側に波形の蘂を表現する。外底はいたって丁寧で平滑な仕上げ。線刻はすべて太い毛彫りで、やや機械的な印象を受けるほど精緻に行う。蛍光X線分析の結果、銅に錫と若干のヒ素が確認された。(No.40と同工)

主要検出元素：銅

他の検出元素：スズ、ヒ素

45 金銅輪宝台（こんどうりんぽうだい）

江戸時代　17-18世紀
1口　銅鋳造　鍍金
蓮弁径12.4　内区径4.4　高2.0　高台径8.7
M936（金銅輪台）

単弁蓮華文を表した鍔をめぐらす。蕊は魚々子鏨を打ち連ね、内側に綾杉状に重なる条線を毛彫する。高台の内側はいたって平滑で、轆轤削り等の痕跡を認めない。蛍光X線分析の結果、銅に鉛を含む青銅の地金で、底以外の部分に鍍金が確認された。

主要検出元素：銅

他の検出元素：金、鉛

46 金銅華瓶（こんどうけびょう）

室町～江戸時代　16-17世紀
一対　銅鋳造　鍍金
口径2.3　高6.9　底径3.5
M2507（鍍金華瓶　一対）

小型の亜字形華瓶。通則通り胴の上下に段を有し､頸と脚に二条の隆帯をめぐらす。外板は厚く、丁寧に研磨する。

47 金銅華瓶（こんどうけびょう）

江戸時代　17-19世紀
1口　真鍮鋳造　鍍金
口径7.6　胴径12.5　底径12.1　高21.7
M981（鍍金大華瓶）

くびれ部に蓮弁を飾った亜字形の華瓶。首･胴･腰に二条の隆帯をめぐらせ、首と腰に二重弁の蓮弁八葉蓮華文をめぐらす。首に比べ腰の括れが緩い。蛍光X線分析の結果、銅亜鉛合金の真鍮に鍍金を施すことが確認された。

主要検出元素：銅、亜鉛

他の検出元素：金

48 銅飯食器（どうおんじきき）

鎌倉時代　13世紀
1口　銅鋳造
口径18.3　高11.3　底径11.0
M980（砂張高杯）

杯部が薄手で大きく開く大型の飯食器。杯内面に一段の段を有し、轆轤削り痕を薄く残す。見込み中央に細かな打痕（使用痕か）を残す。外面は杯部と脚の境に段を有し、脚括れ部に子持ち三条、脚台外側に一条の隆帯を表す。脚内面と杯部外底に中世らしい轆轤削り痕を残す。分析の結果、鉛・錫を若干含む青銅で、ヒ素も若干確認された。外観は砂張に近い。

主要検出元素：銅
他の検出元素：スズ、鉛、ヒ素

49 金銅護摩杓（こんどうごましゃく）

江戸時代　17-18世紀
1柄　銅鋳造　鍍金
長15.7　幅7.2　深1.7
穂(縦)1.6　(横)2.0
M973（鍍金黄銅仏器）

杓部の内面に半肉彫りの三鈷杵を貼り付ける。三鈷部のみ鍍金か。杓は横幅の広い大杓。穂の上面に八葉蓮弁を毛彫りする。線刻内に鍍金を残す。穂内部には鋳肌を残す。外側面の所々に鍍金を残す。

（箱）総高6.9cm　縦24.3cm　横17.7cm
身高5.3cm

牡丹唐草文硯箱を収納箱とする。蓋は受口式に造る。全面を黒漆塗りとする。蓋天井と身側面に牡丹唐草（身短側一面のみ中央に仰向けに寝る唐人を表す）を彫り表し、朱漆塗りとする。蓋天井のみ別に彫り出した牡丹唐草をはめ込む。身は側板を枘組みで組み立て、ごく短い獣鼻の脚を付ける。

蓋表に朱文楕円印「淡如水」と墨書「鎌倉時代／渡金黄銅佛器」の貼紙。蓋箱外底貼紙にペン書きで「DFE(CO)」。

その他仏教工芸

50　銅華瓶（どうけびょう）

鎌倉時代　13世紀
1口　銅鋳造
高7.9　口径1.6　底径2.6
M2242（古銅華瓶）

ごく小ぶりな華瓶。口縁は緩やかに開く。肩はごく撫で肩で、高台は短く開く。上から二条、子持ち三条、子持ち三条の隆帯をめぐらすが、表現は弱い。底板は替え底か。表面に黒漆を塗る。

51　銅華瓶（どうけびょう）

南北朝～室町時代　14-15世紀
1口　銅鋳造
高13.4　口径3.5　底径4.5
M2243（鍍銀華瓶）

やや小ぶりな華瓶。口が大きく開きわずかに肩が張って脚台の高い中世的な形態。上から二条、擬子持ち三条、子持ち三条の隆帯をめぐらす。表面に黒漆を塗る。

52 銅椀（どうわん）

朝鮮半島・朝鮮時代または江戸時代　17-18世紀
10客　銅鋳造
口径8.7　高台径4.5　高4.4
M976（銅碗）

体部が直線気味に外方に広がる有台の小椀。いたって厚手。内外面外底ともに丁寧に研磨する。やや黄味のある白銅色。蛍光X線分析により、銅・錫・鉛合金の青銅で、ヒ素を若干量含むことが確認された。

主要検出元素：銅
他の検出元素：スズ、鉛、ヒ素

53 金銅合子（こんどうごうす）

江戸時代　18-19世紀
1口　真鍮鋳造　鍍金
総高4.5　身高3.1　口径5.4　胴径7.3
M1124（鍍金合子）

扁平な球胴の合子。胴中ほどに二条の隆帯をめぐらす。高台も一鋳。底に同心円の削り痕。蓋はわずかに中央を厚くし、宝珠つまみを作り出す。中ほどに二条の隆帯をめぐらす。蓋裏に同心円の削り痕。

54　銅蝶荷葉文磬（どうちょうかしょうもんけい）

平安時代　12世紀
１面　銅鋳造
肩幅18.2　裾幅19.7　高11.5　縁厚0.6
M931（銅蓮蝶文磬）

裾張りがごく弱いやや小型の山形磬。頂部の花頭形の膨らみが強い。釣耳を欠失。その下に二次的な釣孔をあける。両面の文様を全く異にする。一面は向き合うやや下向きの蝶を篦押しで表す。斑文は大きく絵画的な表現。撞座は単弁八葉蓮華文。弁端を尖らせ、子弁はごく小さい。斜め方向の花弁は間弁表現とする。蓮肉は八窠形。蓮子を表さず、盛り上がりは高い。蕊は短く外側に蕊頭を連ねる。

もう一面は中央から左右に伸びる荷葉を篦押しする。撞座は複弁八葉蓮華文。子弁は小さく描き、斜め方向の四弁は間弁表現とする。蓮肉は円形で盛り上がりがやや高い。蕊は反対面と同様。蝶文の面のほうがわずかに内反り。地はごく暗い暗茶色で黒漆の塗膜を残す。

箱書「竹生島宝厳寺伝来」

55　銅孔雀文磬（どうくじゃくもんけい）

鎌倉時代　12-13世紀
１面　銅鋳造
肩幅19.8　裾幅11.5　高12.9　縁厚0.8
M2909（磬）

横幅がやや広い山形磬。裾がわずかに外反する。釣耳は略円形。篦押しにより左右に向き合う孔雀を薄肉に表す。いずれも脚を交差させる。表裏で尾羽の上下が異なる。撞座は複弁八葉蓮華文ながら各弁が単弁化し、十六弁にも見える。蓮肉は八窠形。蓮子は一＋八個。蕊を丁寧に描く。蓮子と輪郭がつながる。蓮子間に笵傷一箇所。中房の盛り上がりは低くて平板。地はいたって平滑。鋳出しはやや不鮮明。周縁の外側下よりに大きなスあり。湯口の近くか。

56　金銅孔雀文磬（こんどうくじゃくもんけい）

室町時代　15-16世紀
１面　銅鋳造　鍍金
肩幅15.5　裾幅17.8　高10.7　縁厚1.3
M929（金銅獅子孔雀文磬）

裾が直線的に外方へ広がる小型の山形磬。釣耳は円形で大型。縁がきわめて厚い。両面とも篦押しで孔雀を高肉に表す。一方の側の孔雀が両面ともに鋳出が不良。孔雀の尾羽は銅鏡の松葉の表現に近い。ごく細い篦による。撞座は重弁形の単弁八葉蓮華文ながら弁形は複弁形。花弁を二重線で縁取る。中房は円形で魚々子鏨により蓮子を表す。個数は一＋八。中央が著しく突出。蘂は頭を表さず輻線文帯となる。

57　銅獅子孔雀文磬（どうししくじゃくもんけい）

室町時代　16世紀
１面　銅鋳造
肩幅12.8　裾幅15.3　高9.8　縁厚0.8
M928（銅獅子孔雀文磬）

裾が外方に向かって強く張り出す小型の山形磬。釣耳は円形。全体に厚く作り、重い。両面で文様を異にする。一面は向き合う獅子（阿形吽形）をやや高肉に表す。撞座は単弁八葉ながら子弁は長く伸びきる。蓮肉は四弁形。その周囲に蘂を長く捩り形に表す。撞座は全体的に盛り上がりが高い。もう一面は向き合う孔雀をやや高肉に表す。撞座は複弁六葉蓮華文で間弁を表す。蓮肉六窠形。蓮子は一＋六。蘂を長く表現する分、弁が短く幅広い。文様は全体に不鮮明で、地の鋳肌を荒く残す。

58　金銅蓮華形磬（こんどうれんげがたけい）

鎌倉時代　13世紀
１面　銅鋳造　鍍金
幅13.5　高7.0　最大厚（蓮弁）0.75
M930（金銅蓮華形磬）

側面形の開敷蓮華をかたどった磬。釣耳は楕円形。蓮弁は細かく葉脈を表し、弁央にごく柔らかな稜をとる。蓮肉は横長で蓮子を五個表す。蘂頭を大粒の魚々子で打ち連ねる。地の色がわずかに茶味を帯びる。両面に撞木の当たり痕あり。

59　金銅鉦鼓（こんどうしょうこ）

室町時代　15-16世紀
１口　銅鋳造　鍍金
口径15.6　鼓面径12.1　撞座径3.4　厚1.9
M974（金銅鐘鉦鼓）

吊り下げ式の小型鉦鼓。鼓面は膨らみを持たずほぼ平坦。内より一条、二条、三条の圏線をめぐらす。中心に筋弁の八葉蓮華文（間弁付き）の撞座をやや高肉に表す。蓮肉は大きく蕊が無い。蓮子は一＋八個。耳は丸みを持つ三山形。唇は幅広に造る。内面に鋳型の挽き目を残し、一定方向の撫で痕も認める。下端に湯口を設けたか。鼓面の下半に打痕が集中する。

60　金銅蓮華形鉦鼓（こんどうれんげがたしょうこ）

江戸時代　18-19世紀
１口　真鍮鋳造
鼓面径10.1　底径11.9　高3.8
M968（鍍金鈴台）

全体を蓮肉と蓮弁でかたどった床置き型の鉦鼓。鼓面は八窠形の蓮肉を表し、蓮子を一+八+八個表す。表面は微妙に凹凸を持ち、写実的に表す。側面は蕊を蓮弁形に重ねて表す。下半は幅広の複弁八葉の蓮華座とする。弁の先端は外方に尖る。外面の鍍金は箔押しによる。蛍光X線分析の結果、銅と亜鉛の合金でヒ素を若干含むこと、表面の金等が確認された。

主要検出元素：銅、亜鉛
他の検出元素：金、ヒ素

61　銅九字真言小喚鐘（どうくじしんごんしょうかんしょう）

江戸～明治時代　18-19世紀
1口　真鍮鋳造
総高13.7　身高12.3　口径8.8
円相径3.4
M358（青銅鐘）

やや細身の鐘身で、厚めの板状鈕を設ける。笠はゆるやかな甲盛をつけ、肩から口縁にかけ順に二条、一条、子持ち三条、二条、子持ち三条の隆帯をめぐらす。胴中程に九字真言（准胝観音小呪か）を円相内に細く陽鋳する。最下段の区画に細かな水平条線をめぐらす。口縁は駒の爪の形ながら厚さ2mmと薄く造る。内面は粗い鋳肌を残し、舌の吊り鐶を造り出す。舌は亡失。蛍光X線分析により、地金は真鍮であることが確認されたが、表面は緑がかった暗灰色を呈する。

主要検出元素：銅、亜鉛
他の検出元素：スズ、鉛

62　手錫杖（てしゃくじょう）

鎌倉～南北朝時代　14世紀
１柄　銅鋳造　鍍金
総長29.6　錫杖頭長12.8　輪幅5.7　穂口径1.2
M941（錫杖）

上下に括りをつけて頂部の蕨手上に五輪塔を戴いた錫杖頭。輪の括りの外側に三日月形を造り出す。内側の蕨手上にも五輪塔（空輪が相輪形となる）を頂き、その両側に扁平に形式化した宝瓶を置く。蕨手の括りは断面六角形で二条の隆帯で約す。輪の基部には単弁の蓮弁を彫り表す。穂の中程に子持ち三条帯を造り出す。基部には複弁の蓮弁を四葉彫り表し、その上に藻を連ねる。左右に鐶を三鐶ずつ通す。

63 銅錫杖頭（どうしゃくじょうとう）

室町時代　16世紀
１頭　銅鋳造
総長30.8　輪幅14.0　穂口径3.6
M942（大錫杖）

大型の錫杖頭。輪は括りの内側に蕨手を表し、上方に三日月形を造り出す。頂部の蕨手上には火焔宝珠を頂く。内側の蕨手は二条の隆帯で約し、五輪塔形（空輪上半を相輪形とする）を置き、両側に雲気を表す。穂は上から一条、一条、二条の隆帯で画し、各々の間をゆるやかに膨らませる。一方の側面に銘文を刻む。表面に黒漆を塗る。

柄刻銘「永禄二己未年」

64 金銅錫杖頭（こんどうしゃくじょうとう）

室町時代　16世紀
１頭　銅鋳造　鍍金
総長11.4　輪幅5.3　穂口径0.8
M943（鍍金錫杖）

小型の錫杖頭。地蔵菩薩立像の持物か。輪は括りを二箇所設け、各々に三日月形を造り出す。輪の片面は彫り出しで溝をめぐらす。下半の膨らみがやや大きく、全体に梅花形を呈する。頂部の蕨手上に蓮台宝珠を戴く。内側の蕨手は二条の隆帯で約し、上に宝塔を表す。宝珠･宝塔ともに扁平。穂はわずかに下方に広がる細い円筒形で中程上方に二条隆帯を表す。

65　金銅如意（こんどうにょい）

江戸時代または中国・明時代　17世紀
1握　真鍮鋳造　鍍金
長さ31.5cm
頭部縦3.7　横4.8　厚1.2　柄端幅2.2
M924（鍍金如意）

頭部は小ぶりな撫で肩の如意頭形で、内側に二段にわたって鋤彫を加えて縁取りを行う。柄はゆるやかに弓形に反り、端へ向かって広がる。先端は三角形に尖らす。円形の紐穴を開ける。柄上面は柔らかい丸みを持ち、中央をわずかに鎬立たせる。蛍光X線分析により、真鍮の地金で、鍍金を施したことが確認された。

主要検出元素：銅、亜鉛
他の検出元素：金

66　鉄如意（てつにょい）

明治時代　19世紀
1握　鉄鍛造
長さ50.8　頭部（縦）6.9　（横）7.2
M923（鉄如意）

頭は鉄板を匙面をもたせて小ぶりな如意頭形に造り出す。柄は大きく弓形に反らせ端へ向かってわずかに広がる。上面の角は丸みを持つ。柄の端より15cmに紐穴を開ける。

柄刻銘「肥洲住源信國作」

箱蓋表墨書「鉄如意」、箱蓋裏墨書「肥州住原信國所鍛／其名見る本朝鍛冶者及諸書／鐵齊処史愛蔵」楕円形焼印「畫禅盒」。

鐵齊筆「鐵如意附屬巻」一巻が付属。

67　金銅蓮唐草文透彫華籠（こんどうはすからくさもんすかしぼりけこ）

江戸時代　17-18世紀
1枚　銅鍛造　鍍金
口径27.6　高さ2.5
M1450（華籠）

蓮唐草を透彫りで表した華籠。側面形の蓮華と荷葉を交互に表し、間に茎が太く葉の大ぶりな唐草を表す。中央に筋弁の八葉蓮華（間弁付き）を表す。中房に一＋七＋十二＋十六個の蓮子を表す。その外周に籠字で銘を刻む。

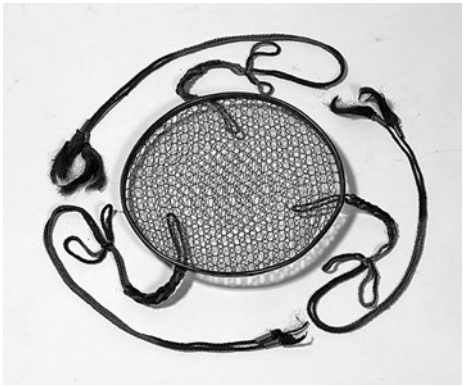
刻銘「奉寄附華籠十二枚之内／妙覚院尊勝／能圓寺慶仁／願主圓如寺現住運雄」

68　金銅蓮唐草文透彫脚付籠（こんどうはすからくさもんすかしぼりきゃくつきかご）

江戸時代　17-18世紀
1口　銅鍛造　鍍金
口径22.7　総高18.2　本体高7.9
M1481（滅金蓮賺青物入）

把手と三脚付の透彫籠。本体は胴に側面形の蓮と荷葉を交互に表し、間に茎の細い唐草を透彫りする。見込みに筋弁の八葉蓮華（間弁付き）を表す。蓮肉には一＋四＋九＋十五＋十六個の蓮子を表す。外底に先の外反する細い脚を鋲留めする。把手の上面に細い蹴彫りの唐草を表す。

箱蓋表・箱側面「㊞蔵／滅金蓮賺青物入／遠藤氏」の墨書



69　金銅華籠（こんどうけこ）

江戸時代　17-18世紀
１枚　銅鍛造　鍍金
口径30.7　高2.2
M984（鍍金華籠（散華皿））

金銅製の針金二本を一組で籠状に編んだ華籠。覆輪は太く内側に竹芯を通し針金を麻糸で留める。三本の撚り紐を垂下し、先を房を作る。房に被るように円筒形の金銅露金を作る。

70 銅経筒（どうきょうづつ）

平安時代　12世紀
１口　銅鋳造
総高29.1　身高23.4　口径10.7　底径10.7
蓋外径12.4　胴厚0.2
M309（鋳銅経筒）

被蓋式の経筒。蓋はゆるやかな甲盛りをつけ、庇状に先が張り出す。口縁はやや内傾し身の外側に被さる。鈕は未敷蓮華形。中程に座（蓼か）を造り出し、下半は末広がりに長く立ち上がる。身は完全に垂直に立ち上がる円筒形。底まで一鋳。外面は全面緑青が覆うため、ケズリ等の痕跡は判別できず。外底に一文字形の湯口痕・アガリを計三本残す。身の内底の状況から、経巻は一巻仕立てとみられる（複数巻の痕跡なし）。

71 銅経筒（どうきょうづつ）

平安時代　12世紀
１口　銅鋳造
総高（現状）36.2　身高28.7　口径9.1
底径13.3　蓋外径12.8　胴厚0.15
M310（積上式鋳銅経筒）

銅鋳造。身を三段に造る積上式経筒。各段の中央に三条ずつ刻線をめぐらす。基台は上下二段からなる。上段の高さが高い。下段は下方に向かって強く広がる。蓋は覆鉢上に相輪を立てる形。相輪は別造で下半のみ残る。下半は一段の肩を造り出し、口に向かって強く広がる。全面に緑青を生じ、一部に木炭が付着する。基台上面の痕跡から経巻は一巻仕立てとみられる。胴内壁に紙片が付着する。現状で胴最下段と基台を樹脂で接合、固定する。

72 銅経筒（どうきょうづつ）

平安時代　12世紀
１口　銅鋳造　鍍銀か
総高27.4　身高24.2　口径11.8　底径11.8
蓋口径12.3　胴厚0.1
M994（金銅経筒・経筒外容器）

被蓋式の経筒。蓋はごく緩やかな甲盛りをつけ、口縁は垂直に立ち上がる。鈕は未敷蓮華形で蓋の中央に枘を通し、裏でかしめ留める。蓮弁は鋳造段階から表している。表面の一部に鍍金（鍍銀の可能性もあり）を残す。鍍金は沈線の中に入り込む。身は完全に垂直に立ち上がる円筒形。器壁がごく薄く、表面に轆轤削り仕上げの痕跡を明瞭に残す。下端に底板の受けを造り出し、板を嵌めた後に下端を折り曲げ固定する。底板は鋳造、鍛造の識別困難。口縁近くの外面に若干の鍍銀面が観察される。全体に黒味を呈するのも鍍銀の黒変によるものか。胴中程に鋳掛け箇所あり。底板のほぼ中央に円孔（径0.35）を２個開ける（蓋を固定するための糸を通したものか）。内底には経巻の痕跡なし。

箱蓋裏に「山城国花背経塚/出土」とあり。「花背」を塗りつぶす。

73 線刻薬師如来鏡像（せんこくやくしにょらいきょうぞう）

鎌倉時代　12-13世紀
１面　銅鋳造
径35.6　縁高0.35　縁幅0.5　界圏22.5
鈕長1.6　鈕幅0.7　鈕高0.7
M1021

鏡胎は背面に断面台形の周縁をめぐらし、長方箱形の鈕を二個、一鋳で作り出す。一条の界圏をめぐらす。

鏡面には、左手に薬壺を持つ薬師如来坐像を表す。線刻はやや粗い細めの蹴彫り。目尻がやや吊り上り、ほうれい線を強調する。螺髪も細かく強調気味に表す。衣文も襞を細かく写実的に表現する。蓮台の蓮弁内部は弁脈等を表さない。頭光身光とも二重線で表す。

下端にスを顕著に残す。鏡背の鋳肌は粗めで中央に鳥目穴跡、外区に挽目を残す。

74 十一面観音懸仏（じゅういちめんかんのんかけぼとけ）

鎌倉～南北朝時代　14世紀
1面　木胎　銅鋳造　鍛造　鍍金　鍍銀
径15.5　鏡板厚（覆輪上）0.8　覆輪幅0.8
像総高(蓮台とも)7.7　膝張4.2　面高1.3
像奥行（蓮台中央）2.2
M1022

檜製の円板に鍍銀鏡板を重ね、金銅覆輪をめぐらす。覆輪上に二個一組と一個の鋲を交互に打つ。鏡板状に、銅鋳造鍍金の半肉彫り十一面観音像を上下で枘留めする。目と眉、唇に黒の補彩。衣文や蓮弁はやや幅広の毛彫り。化仏は頂上面一尊、側面仏十一尊。ごく簡略に表す。こめかみに、円穴を開け、右側に木釘の足が残る。宝冠を留めたものか。光背はごく薄い銅板製鍍金で、観音像周囲にわずかに残る。像の左右に銅鋳造(鍍銀か)の華瓶を留める。左右斜め上方、獅子嚙座を銅鋲で留める。獅子嚙座は小ぶりで、やや平板な造り。細部の表現は簡略で口元のみ赤色の補彩。鐶座は扁平茄子形。

箱に「那智出土／十一面観音掛佛」と墨書する貼紙

75 金銅燕（こんどうつばめ）

室町時代　15-16世紀
1個　銅鍛造　鍍金
長15.2　幅4.6　高4.1
M1127（鍍金　燕）

神輿屋根の降棟先に取り付けた燕。体部と羽を別に造り、組み合わせる。間は針金を通し、青と透明のガラス小玉で留める。（玉は形が整っており江戸時代のものか。）羽毛は細かな毛彫で半円形に打ち連ねる。目は大粒の魚々子鏨で表す。嘴に瓔珞を下げるための穴を開ける。腹部に後補の台を取り付けるための円孔を開けるが、元は柱を取り付けていたか。

茶道具

76　梅樹竹虎図釜（ばいじゅたけとらずかま）

室町末〜桃山時代　16世紀
1口　鉄鋳造
総高21.0　身高18.0　口径14.4　胴径26.2
幅27.7　鐶付長3.0
M1149（古芦屋操口梅竹藤虎図釜）

やや裾広がりの繰口。やや扁平で尻張り気味の真形釜。口の周囲に細い隆線をめぐらす。胴の一方の面に梅樹と竹、もう一方の面に藤花の掛かる竹林と虎を薄肉の篦押しで表す。文様細部は意図的に荒く表現する。やや荒い鋳肌ながら光沢あり（漆によるか）。全面にわたり細かく剥離する。鐶付は鬼面形で、彫りはやや深いが顎は短い。底は替底。蓋は唐金蓋。花の実形つまみをつける。

（箱蓋表）「あしや　　釜」（箱蓋裏）「繰口茶釜／一、梅竹地紋炉用／虎　藤小紋附／右粉入鉄味共　よろしく／芦屋ノ上作なり／鐶附鬼面 小形上品なり／胴径 八寸八分／口径 四寸六分／源弥五郎（花押）／旧宗家傳来千室（花押）」

一般に越前芦屋といわれるタイプ。源弥五郎は江戸名越家の釜師か。入札札添う。風呂敷に定三の「芦屋／梅藤虎地紋」墨書。

77　肩霰松竹図真形釜（かたあられしょうちくずしんなりがま）

桃山時代　16-17世紀
1口　鉄鋳造
総高22.5　身高19.2　口径13.6　胴径24.0
羽径26.8　幅26.2　鐶付長3.6
M1158（石見芦屋肩霰松竹図真形釜）

肩がやや張る真形釜。口造は繰口。羽以下は後補。肩の二条隆線の間に粒の細かな霰を打ち詰める。霰は低平気味で先が丸みを帯びる。胴の一方の面に松樹、もう一方の面に竹を薄肉の篦押しで表す。鋳肌は比較的なめらかながら細かなス、鋳皺が目につく。鐶付は鬼面。頭部の彫りは高く、量感あり。鐶付の型を埋け込んだ際に周辺の霰が擦り消される。蓋は唐金蓋。鈴形つまみをつける。

（旧箱蓋裏）「寸松庵傳来／霰真形松竹／佐久間将鑑常用／高桐院／本坊什（漆銘）」（旧箱内）「さかや／七兵衛」（新箱蓋裏）「肩霰真形釜／一、口径四寸五分半　一、羽径八寸九分半／一、高さ六寸五分　一、鐶付鬼面／口のくり稍強く肩穏かに胴は裾／開きで、錘羽は大き目である。鐶付は／手強い鬼面で肩に霰を押出し、／羽上の前後に松と竹を現わしている／が、仲々として近代に通じる図柄であ／る。所製年代は材質手法等から桃／山時代の石見芦屋と考えられる。／昭和癸丑卯月垤志（黒円印「長野」）」

長野垤志は石見芦屋とするも、芦屋系釜の分類研究は未確定。長野垤志（1900-1977）は各地の古作を研究。名古屋の釜師伊藤一正との関係で木村定三の釜を鑑定したか。1963（昭和43）年に重要無形文化財保持者（人間国宝）。箱書の寸松庵は大徳寺の塔頭。江月宗玩を開祖に、元和７年(1621)佐久間将監真勝が創建。現在は廃寺。高桐院も大徳寺塔頭。風呂敷に定三の「芦屋／桃山時代／長野垤志極／肩霰真形釜／松竹図」墨書。1975（昭和50）年日本経済新聞社主催「茶の湯釜名品展」への出陳依頼状添う。

78　肩霰菊花散真形釜（かたあられきっかちらししんなりがま）

桃山～江戸時代初期　16-17世紀
1口　鉄鋳造
総高22.1　身高18.1　口径13.6　羽径26.5
幅27.2　鐶付長3.8
M1151（石見芦屋肩霰菊花紋真形釜）

胴が直線的に広がり気味の真形釜。口は内傾しながら立ち上がる。羽以下は後補。肩から胴にかけ二条の隆線を巡らし、間を霰地とする。霰はやや小粒で先は丸みを持つ。胴に大小の菊花文をほぼ等間隔に散らす。鋳肌はやや荒いが光沢を持つ。鐶付は法螺形。外型に鐶付型を埋け込む跡を明瞭に認める。蓋は唐金蓋。やや大きめの花の実形つまみをつける。

（極書）「肩霰真形釜／一、口径四寸五分五厘／一、羽径八寸九分／一、高さ五寸九分五厘／一、鐶付螺貝／横廣の形で肩に霰を／押出し、腰に大小の菊／花を判押にしている。／これは石見芦屋特有／の様式である。鐶付の螺／貝は、この地として海の物を／用いた所見のもので珍ら／しい。所製年代は慶長／時代末期と考えらえる。／昭和壬子二月／釜作り／垜志（黒円印「長野」）」

77の肩霰松竹図真形釜よりやや新しい。長野垜志は石見芦屋とするも、芦屋系釜の分類研究は未確定。風呂敷に定三の「垜志極／石見芦屋／肩霰菊花文／真形釜／鐶附螺」墨書。昭和50年日本経済新聞社主催「茶の湯釜名品展」への出陳依頼状添う。1989（平成元）年11月11日の垈還壽茶会に使用。

79 肩衝霰釜（かたつきあられがま）

桃山～江戸時代　16-17世紀
1口　鉄鋳造
総高22.0　身高19.0　口径13.0　胴径34.6
幅36.8、鐶付長3.8
M1166（越前芦屋肩衝霰釜）

肩が肩衝状に貼る霰釜。口は繰口。底は後補。霰はやや間があき、柔らかに突出する。鐶付は鬼面。頭頂の量を強調する。蓋は唐金蓋。蕾形の鈕をつける。

蓋裏に仰止齋による箱書。「時代／肩衝霰釜／仰止（花押）」

旧貼紙に「天明」。木村定三の新貼紙に「越前芦屋」とする。

80 十牛図霰釜（じゅうぎゅうずあられがま）

室町時代　15-16世紀
1口　鉄鋳造
総高20.2　身高18.4　口径13.1　胴径27.0
幅27.6　鐶付長3.1
M1153（古芦屋霰釜 十牛図）

水平な肩とやや裾広がりの胴の間に法をつけた形の釜。口造は姥口。胴に団扇形の窓枠を設ける。前後図柄の異なる十牛図をごく薄い肉取りの篦押しで表す。全面を大粒の霰地とする。霰地の頂部は滑らかで、粒の先端は丸みを帯びる。鋳肌は比較的滑らか。鐶付は松笠形。底は替底。内面に中子を撫で調整した痕跡を認める。蓋は共蓋と唐金蓋の各一枚。共蓋は亀裂を生じ、真鍮・銀錵で繕う。いずれも花の実形つまみをつける。

（箱蓋裏）「霰釜／胴[六]　八寸九分／口径　四寸二分半／環付　松笠／右古天猫作無紛／者也／[子]二月　西村道也（黒方印「西村」）」（箱側面貼紙）「古天猫作／霰釜」

天猫（天明）と極めるも、霰地に窓枠を設け意匠を篦押しした芦屋真形釜が知られる。西村道也は京都西村家の釜師で、江戸前期から中期にかけ同名が三代続いた。風呂敷に定三の「古芦屋／霰釜／十牛図」墨書。十牛図の部分拓本二枚添う。

81　不二形羽釜（ふじがたはがま）

江戸時代前期　17世紀
1口　鉄鋳造
総高（共蓋）20.8　身高19.3　口径11.9
羽径21.1　鐶付長3.2
M1150（古芦屋不二形羽釜 許由巣父図）

富士形ながら肩衝で、直立気味の胴と、急に広がる裾からなる。口造はやや高い輪口。幅狭の羽が繞るも、以下底にかけては後補。胴の両面に許由巣父図をやや高肉に鋳出す。細部は意図的に荒く表現し、雅味を演出する。肩の直下に三個一組の塁座をめぐらすが、鋳出は不鮮明。鋳肌はやや荒肌。鐶付は小さめの鬼面形。彫りは深い。内面にわずかに中子を横に撫でた痕跡あり。蓋は共蓋と唐金蓋各一枚。共蓋は内側を落込みとし、菊座付き切子頭形のつまみを造り出す。鉄鐶を通す。本体と鉄の質感を異とし、後補とみられる。唐金蓋は中央に向かって大きくくぼます。栂子の実形（虫喰）のつまみをつける。製作は新しい。

（箱蓋表）「巣父許由地紋／不二形羽釜　芦屋古造」（箱蓋裏）「富士形羽釜　羽寸沿外／一胴大サ　六寸二分／一口廣　四寸／一鐶附　鬼面／但シ 巣父許由地紋塁座アリ／右芦屋古造無紛者也／丁卯／二月日／釜師／庄兵衛（黒円印「味宜」）」（箱正面）「芦屋不二形釜」「（貼紙）四弐弐（朱方印「禄」）」（箱側面貼紙）「（朱印）棚（朱書）乙（朱印）茶／第参五八號　（墨書）古芦屋不二形羽釜／巣父許由繪　鉄替蓋副」（箱背面）「芦屋不二形釜」

芦屋古造と極めるも、芦屋風とすべきか。庄兵衛は江戸中期に京都三条釜座で名越三典に釜作を学んだ下間庄兵衛を初代とし、代々同名を襲う。味宜は三代で、天保９年（1838）没。「柱心寮」の添状が添う。風呂敷に定三の「（朱丸三つ）地紋／許由巣父／古芦屋不二形／羽釜／久原家／傳来」の墨書。1982（昭和57）年５月５日の天下太平群仙遊樂茶会、1985（昭和60）年４月29日の丑年に因む茶会に使用。

82　梅網干図釜（うめあほしずかま）

桃山時代　16-17世紀
1口　鉄鋳造
総高20.2　身高18.7　口径12.2　胴径27.5
鐶付長4.9　鐶付幅4.0
M1156（伊勢芦屋撫肩釜）

肩は高く甲盛をつけた形で、胴との境を塵居状とする。口造は姥口。胴はわずかに膨らみを持ちつつ直線的に立ち上がるが後補とみられ、当初の胴形は不明。肩の一方の面に梅樹を薄い肉取り表現で、もう一方の面に網干と帆掛け船を細線表現で鋳出す。鋳肌はやや粗めの石目状の肌ながら芦屋風の光沢も持ち合わせる。肩に常張形の鐶付を設ける。蓋は共蓋。中央に薄い甲盛をつける。銅製桔梗形（柱は八角形で綾杉状の刻線を施す）のつまみをつける。

（箱蓋裏）「姥口常張釜／一胴径　九寸分半／一口廣　四寸分半／一鈬附　常張／但梅干網舟地紋アリ／右ハ 紹鷗時代道仁作無紛／者也／己酉／初冬日／御釜師／大西清右衛門（黒円印「大西」）」（箱新蓋裏）「富士釜／一、口径四寸口五厘　一、胴径九寸／一、高さ五寸七分　一、鐶付鉦鼓耳／冨士形風で、替底が高く打底／になっているから重量感がある。／分厚で大きな常張鐶付はむしろ／この形を引〆ている。文様は網干を／見せた海邊に梅樹を現わした／ものであろう。所製年代は材質／文様等から室町時代末期の伊／勢芦屋と考えられる。／昭和壬子二月　釜つくり／垤志（黒円印「長野」）」

大西清右衛門は京都三条釜座の釜師。本作を西村道仁と極める。長野垤志は伊勢芦屋とするも、芦屋系釜の分類研究は未確定。風呂敷に定三の「（三隅に朱丸）紹鷗時代／長野垤志箱／冨士釜／常張鐶付」の墨書。杉山音三郎の書簡、昭和50年日本経済新聞社主催「茶の湯釜名品展」への出陳依頼状添う。

83　車軸形釜（しゃじくがたかま）

桃山～江戸時代初期　16-17世紀
1口　鉄鋳造
総高21.8　身高18.5　口径12.6　胴径27.6
鐶付長5.4
M1161（車軸釜 環付蜂）

垂直に立ち上がる高めの口で車軸を表し、富士形の肩とやや膨らみを持つ胴からなる車軸形釜。口縁に覆輪を造り出す。肩から胴にかけ荷葉の葉脈をごく薄肉に鋳出す。鋳肌はややきめ細かい。鐶付は大ぶりな蜂形。底は替底。蓋は唐金蓋。花の実形つまみをつける。割れ目を鎹で繕う。

（極書）「車軸形釜／一胴径　九寸壱分／一口径四寸二分／一鐶附　蜂／但蓮地紋有之／右釜紹鴎時代道仁作／無紛者也／丁丑／林鐘日　御釜師／大西浄長（黒円印「大西」）」

大西浄長は京都三条釜座の釜師大西家十三代（1866-1943）。本作を西村道仁と極める。西村道仁（1504-1555）は京都三条釜座の釜師で、西村家の始祖とされる。武野紹鴎、織田信長に仕えたが､確実な作例は知られない。風呂敷に定三の「道仁作／車軸釜／鐶附／蜂」と墨書。

84　大耳釜（大耳御釜）

桃山時代　16世紀
1口　鉄鋳造
総高25.3　身高23.2　口径11.5　胴径26.0
鐶付長8.7
M1248（大耳御釜）

筒状に高く立ち上がる口（口縁の上端が外方にわずかに突出）と豊かな膨らみを持つ肩、垂直に立つ胴からなる車軸形の釜。鋳肌はいわゆる鮫肌に近い光沢を持つ。底は替底。鐶付は板状で雨龍を象る。蓋は共蓋と唐金蓋各一枚。共蓋は内側を落込みとし、重圏をめぐらす。棗形つまみをつける。唐金蓋は七弁花の座に桜花透かしのつまみをつける。

（蓋紙）「大耳御釜／豊公より三斎公拝領」（箱蓋表貼紙）「大耳御釜」（箱蓋裏貼紙）「三斎公時代釜師／浄久／右之者鋳継くものと見らる由／宜釜之由／宝暦甲年春　　小堀長順目利」「大耳御釜の四字／細川三斎公筆／細川子爵家傳来」（書付）「記／天耳釜／右之品家祖三斎公／豊公より拝領せし／者傳此度御懇望／に□□御ゆつり申候／もの也／昭和二年七月／旧宇土子爵細川家（朱方印「子爵細川立興」）／［切取］殿」

豊臣秀吉から細川三斎と伝える。1927（昭和２）年まで宇土細川家の家蔵。書付当時の当主は細川立興（1871-1959）。1754（宝暦４（甲））年に本釜を釜師浄久が修理したとみた小堀長順（1700-1771）は、肥後熊本藩士で同藩の茶道方。浄久は京都三条釜座大西家二代浄清の弟（1686没）。1987（昭和62）年10月11日の上飯田小茶会に使用。

85　阿弥陀堂釜（あみだどうかま）

桃山時代　16-17世紀
1口　鉄鋳造
総高25.0　身高20.9　口径14.5　胴径27.0
幅28.1　鐶付長3.4
M1165（阿弥陀堂釜）

やや撫肩でわずかに尻の張る阿弥陀堂形の釜。口造り繰口。鋳肌は荒い石目状の荒らし肌。正背面とも荒い弾き肌風の状態になる（鋳造欠陥か判然とせず）。鐶付は鬼面。頭部の表現はいたって甘い。底は替底。蓋は共蓋。つまみは唐金製で、花の実形。

（箱蓋表）「与二郎作／阿弥陀堂釜」（箱蓋裏）「中阿弥陀堂釜／一胴大サ　八寸七分／一口廣　四寸八分／一鐶付　鬼面／右利休時代与二郎作　／無紛者也／未／霜月日　　釜屋／庄兵衛（黒円印「味次」）」（箱側面）「阿弥陀堂釜」

与二郎（次郎）は、京都三条釜座の釜師。辻與次郎實久。梵鐘や燈籠の作例もある。阿弥陀堂釜は利休好みの代表で、新旧の作例が多い。本釜は古作か。釜屋庄兵衛味次は下間庄兵衛二代。宝暦頃活動。1800（寛政12）年没。風呂敷に定三の「與次郎／阿彌陀堂／釜」の墨書。

86　延元二年銘丸釜（えんげんにねんめいまるがま）

江戸時代前期　17世紀
1口　鉄鋳造
総高20.4　身高16.9　口径13.2　胴径23.4
幅23.7　鐶付長3.4
M1152（釜）

肩が張り胴が垂直に立つ丸釜。口造は輪口。口の周囲に一条の細隆線をめぐらす。胴に「延元二年」「六月日」の銘を陽鋳する。鋳肌は比較的滑らか。鐶付は幅広の鉦鼓耳。底は替底。肩の一箇所に埋金あり。中子の肌はいたって滑らか。蓋は唐金蓋。椎の実形（虫喰入り）のつまみをつける。

延元２年は1337年。年紀の由来は不詳。実際は江戸前期頃の京釜か。風呂敷に定三の「延元二年／六月銘／釜」と墨書。1975（昭和50）年５月５日の利休流無作法茶会に使用。

87　富士形釜（ふじがたかま）

桃山時代　16-17世紀
1口　鉄鋳造
総高16.3　身高13.2　口径14.5　羽径26.8
鐶付長3.8
M1154（越前芦屋富士形釜 環付遠山 松梅図）

肩が角張り胴が富士形をなす釜。口造は大きく、輪口をなす。肩に一段、胴の上寄りに一段のごく薄い段を設ける。胴に梅樹を篦押しで薄肉に表す。鋳肌は比較的なめらかで光沢を持つ。鐶付は遠山形。胴と底の境に羽をめぐらす。底は替底か。蓋は唐金蓋。やや下膨れの球形つまみをつける。

（箱蓋表）「冨士形釜／胴衆梅紋有　唐金蓋」（箱蓋裏）「冨士形釜　唐銅蓋／胴、衆梅紋有／羽先大サ 八寸八分／口差渡シ 四寸八分／鈬付　遠山／右は慶長時代初代名越家昌作／無紛者也／文政十三寅年初夏證之／御釜師／名越弥五郎／藤原昌孝（花押）」（箱側面）「五」（箱底）明治廿六年／福西二ノ／拾六番地／斎藤一迎」

名越家昌は江戸名越家の初代。兄三昌と共に1614（慶長19）年京都方広寺大仏の梵鐘を鋳造。1830（文政13）年箱書の名越弥五郎藤原昌孝も江戸名越家の釜師。風呂敷に定三の「越前芦屋／冨士形釜／松梅図」の墨書。1968（昭和43）年３月４日の利休流無作法茶会に使用。

88 四方釜（よほうがま）

桃山〜江戸時代前期　17世紀
1口　鉄鋳造
総高21.5　身高18.2　口径11.9　幅21.6
奥行18.7　鐶付長3.6
M1247（利休好み四方釜）

口造は短く立ち上がる繰口。胴が垂直に立つ四方釜。口の縁を凹凸に造り、全体に意図的に大小のスや鋳かけを表し雅味を表現する。鐶付は鬼面。真鍮製の鐶を通す。細部はほとんど表されない。蓋は唐金蓋。花の実形つまみをつける。

（極書）「四方釜／胴[太] 六寸／口径 四寸壱分／鐶付鬼面／右古浄味作無紛者也／子／三月／西村弥三右衛門／識（花押）」（極書袋表）「利休形四方釜／西村弥三右衛門極入」（同裏）「天明八戊申年／二月吉日／此袋造」（箱蓋表）「四方釜　[古] 浄味作／弥三右衛門極書付添」（箱蓋裏貼紙）「浄味ハ弥五郎入道差／元和元己未年四月卒／□名越道仁之聟也」（箱側面）「四方釜」（箱側面貼紙）「利休好四方釜／古浄味作[振札漆]」「利休好／四方釜」

西村弥三右衛門は京都三条釜座の西村道弥の家系が代々襲名。極書の「古浄味」は三条釜座の名越家初代三昌。子の家昌と共に1614（慶長19）年京都方広寺大仏の梵鐘を鋳造。風呂敷に定三の「利休好み／四方釜／古浄味作／鐶付／鬼面」の墨書。

89 霰繰口丸釜（あられくりぐちまるがま）

江戸時代前期　17世紀
1口　鉄鋳造
総高22.1　身高19.4　口径11.3　胴径27.3
幅30.2　鐶付長3.7
M1253（霰繰口丸釜）

肩がやや張り気味の丸釜。名称は繰口とするも括れはなく、上方へ向かってわずかに窄まる。底の下半のみ替える。口から胴にかけて霰地とする。上方に向かって粒を小さくする。霰の形状は先をあまり尖らせず、膨らみを持たせた古様な形をとる。鈬付は鬼面。頭部はやや彫り深く表現する。蓋は唐金蓋。五窠花の実形つまみをつける。

（極書）「霰繰口丸釜／一胴径　九寸分／一口廣三寸七分半／鈬付　鬼面／右（は）元禄年時代古浄／味作無紛者也／癸丑／晩冬日　御釜師／大西清右衛門（黒円印「大西」）」（箱側面貼紙）「與治郎霰繰口丸」「八番」

大西清右衛門は三条釜座の釜師。浄味は三条釜座釜師の名越家。風呂敷に定三の「古浄味／霰繰口／丸釜」の墨書。

90 雲龍釜（うんりゅうがま）

江戸時代後期　19世紀
1口　鉄鋳造
総高17.6　身高16.5　口径11.5　底径12.3
鐶付長3.3
M1164（無文雲龍釜 螺□付）

底へ向かってやや広がり気味の筒形をなす雲竜釜。雲竜図は表さず素文とする。鋳肌は荒い砂目地状の荒らし肌。鐶付は螺形。底は替底か。蓋は共蓋。内側を落込みとし、意匠的な挽目を鋳出す。共蓋ながら後補か。つまみは切子頭形で鉄鐶を通す。座は十六弁菊花文。

（箱蓋表）「雲竜釜／御釜師／名越浄味（黒円印）」（箱底貼紙）「二十五年　弐五／□五十三号／雲龍釜」

名越浄味は京都三条釜座の釜師。作者本人の箱書添い。風呂敷に定三の「共箱／名越浄味作／無文雲竜／釜／螺鐶付」の墨書。1995（平成７）年４月23日の大鵬茶会に使用。

91　富士釜（ふじがま）

江戸時代前期　17世紀
1口　鉄鋳造
総高17.9　身高15.9　口径10.6　胴径23.4
鐶付長4.8
M1160（富士釜 松地文 環付遠山）

裾が強く広がる富士形の釜。口造はごく薄い輪口。ごく細い幹の松林を表すも、裾の岩・洲浜などは不明瞭。鋳肌は比較的きめ細かいが、下半は裾へ向かって強く荒らす。鐶付は遠山形。底は替底。蓋は唐金形。花の実形のつまみをつける。

（箱蓋裏）「冨士釜／一羽先　七寸七分／一口廣三寸五分／一鐶附　遠山／但松地紋有之／右釜寛永年時代浄林作／無紛者也／庚辰／初春日／御釜師／大西浄長（黒円印「大西」）」

浄林は京都三条釜座の釜師大西家初代（1590-1663）。これを極めた浄長は大西家十三代（1866-1943）。風呂敷に「富士釜／松地文／環付遠山」の墨書。

92　月形釜（つきがたがま）

江戸時代前期　17世紀
1口　鉄鋳造
総高8.8　口径11.6　幅24.4　奥行15.5
M1162（月形釜 姥口）

釣舟花入の形を踏襲した月形釜。口造は姥口。胴の弓なりの上縁に沿って雷文を表す。鋳肌は比較的滑らか。鞆舳先部の界に鋳型の境目がある。底は平底で凹凸が著しい。口の両側に半円形の鐶座を一個、二個設け、前者に円形、後者に洲浜形の鉄製鐶を通す。蓋は唐金蓋。花の実形のつまみをつける。

（箱蓋表）「月形釜」（箱蓋裏）「月形釜／一姥口径三寸八分／一胴径　八寸／五寸壱歩／一地紋　角渦有／右大西浄清作無紛者也／戊清秋／釜師／立松山城（黒円印）」

浄清は京都三条釜座の釜師大西家二代（1594-1682）。立松山城は、江戸の釜師堀山城九代の門人とされ、幕末頃に活動した。風呂敷に定三の「大西浄清作／月形釜／立松山城箱」の墨書。

93 霰瓢形釜（あられひさごがたかま）

江戸時代中期　18世紀
1口　鉄鋳造
総高19.8　身高17.1　口径14.2　胴径27.0
幅28.5　鐶付長4.5
M1163（霰瓢形釜）

瓢の括れから下半をかたどる。口造は姥口。全面に粒が細かく先の尖った霰を等間隔に、間をやや開けて打つ。鐶付は鬼面。頭部の彫りは至って甘い。底は替底。蓋は唐金蓋。栂子形のつまみをつける。座は肉取り高い桜花形。

（箱蓋裏）「霰瓢形釜／一 胴径　八寸九分／一 口廣四寸七分／一 鐶附　鬼面／右釜享保年時代五郎左衛門／作無紛者也／己卯／五秋日／御釜師／大西浄長（黒円印「大西」）」（箱側面貼紙）「享保・五郎左エ門／霰瓢形／浄長箱」

五郎左衛門は江戸の釜師大西家の定林（享保12年［1727］没）。浄長は京都三条釜座の大西家十三代（1866-1943）。風呂敷に定三の「享保／五郎左エ門／霰瓢釜／浄長箱」の墨書。

94 手取釜（てどりがま）

室町～桃山時代　16世紀
1口　鉄鋳造
総高（含捕手）30.8　本体高（含蓋以下）19.7
胴径33.7　身径17.4　口径13.6
幅36.6　鐶付幅4.8
M1155（手猫手取釜）

把手と注口を持つ手取釜。口は内傾しつつ、高く立ち上がる輪口。胴の中ほどに稜をつけ、以下は替底。鋳肌は石目状の荒し肌。注口は太く、先を尖らせない。鐶付は板状花先形、孔を三個を開ける。中央の孔に鍛造の把手を通す。取把手は上半を中空とし、両側面に一か所ずつ三個一組の小孔をあける。蓋は唐金蓋。つまみは朽込を入れた花の実形。

（箱蓋表）「手取釜」（箱蓋裏）「手取釜/一　胴径七寸九分/一　口廣　四寸六分/　一　鐶附　木瓜耳/右釜古天明作無紛者也/丙申/仲春日/御釜師/大西清右衛門（黒印）」（箱側面貼紙）「天猫手取釜」 風呂敷に定三の「天猫手取釜」の墨書。

95 瓜釜（うりがま）

江戸時代前期　17世紀
1口　鉄鋳造
総高24.3　身高21.1　口径10.7　胴径23.3
幅24.0　鐶付長5.3
M1159（古天猫爪形釜）

丸みを帯びた瓜形の釜。口造はやや内傾し短く立ち上がる輪口。鋳肌は弾き肌風の荒らし肌。鐶付はやや大ぶりの遠山形。底は替底。蓋は唐金蓋。七宝を透かした球形のつまみをつける。

（箱蓋表）「天猫瓜釜」（箱蓋裏）「瓜釜／胴太 七寸五分／口径三寸五分／鐶附遠山／右天猫古作／戊 二月十六日　西村道也（黒方印）」（箱側面貼紙）「え百七拾七／古天猫瓜釜／道也極添」「天猫瓜形り 釜／西村道也□□」

西村道也は京都三条釜座の釜師。風呂敷に定三の「天猫／瓜形釜」の墨書。

96 雲龍釜（うんりゅうがま）

江戸時代　17-18世紀
1口　鉄鋳造
総高18.2　身高17.1　口径10.9　胴径13.6
幅15.5　鐶付長2.6
M1249（鐶付鬼面釜（玉取雲龍釜））

筒形でやや尻へ広がる雲龍釜。口造は姥口。鋳肌は土壁様の荒らし肌。胴に雲と玉取龍一頭を篦押しでめぐらす。龍の細部の表現は意図的に簡略に表す。鐶付は鬼面（細部は簡略に表す）。底は替底。蓋は共蓋。共蓋は内側を落込みとし、菊座付き切子頭形のつまみを造り出す。鉄鐶を通す。鉄鐶一双が添う。

（蓋紙）「初代寒雉徳翁作／玉取雲龍釜」（箱蓋表）「初代寒雉徳翁作／玉取雲龍釜」（箱蓋裏）「姥口／雲龍釜／一胴径　四寸三分／一口廣　三寸五分／一環附　鬼面／右初代寒雉作無紛者也／御釜師／高橋因幡（黒円印）／己酉／季冬日」（箱側面貼紙）「雲龍釜」

宮崎寒雉は加賀金沢の釜師で、初代徳翁（義一、1631-1712）は大西浄清（名越家説もあり）に師事。仙叟（千宗室）と親交。高橋因幡は初代下間荘兵衛の弟子で、江戸後期に二、三代続いた。蓋紙の墨書は定三による。風呂敷にも「初代寒雉／雲龍釜／高橋因幡／箱書」と墨書。1978（昭和53）年６月６日の卒軒流無作法茶会、1997（平成９）年５月７日の東海道膝栗毛 富士遠望船中遊楽茶会に使用。

97　矢筈釜（やはずがま）

江戸時代　17-18世紀
1口　鉄鋳造
総高17.9　口径11.7　胴径24.6　幅26.3
M1157（寒雉 矢筈釜）

口造は乙御前口。肩が口へ向かって直線的に下がる。胴は裾に向かって直線的に広がる。肌は岩肌状の荒らし肌。口や肩に大きなスがある。特に肩のスは熔岩状の肌を呈する。底は生底とみられ、細かなスを多数認める。鐶付は賽の目形。仙叟（千宗室）好み。蓋は唐金蓋。内側を落込みとする。三方に大きな猪目を透かした実形のつまみをつける。

（箱蓋裏）「寒雉（黒方印）」（箱側面貼紙）「（朱書）ろ第弐拾号／（墨書）寒雉／矢筈釜／共箱」「り九九百八拾左番／寒雉作／釜」

宮崎寒雉は加賀金沢の釜師。初代は仙叟（千宗室）と親交。以来仙叟好みの釜を製作。当代まで十四代続く。風呂敷に定三の「寒雉／矢筈釜／共箱」の墨書。

98 芦舟透木釜（あしぶねすきかま）

昭和時代　20世紀
1口　鉄鋳造
総高18.3　身高15.7　口径12.2　羽径32.7
鐶付長5.9
M1175（芦船透木釜 常帳鐶添）

肩衝形。幅広の羽をめぐらす。口造はわずかに内傾する甑口。胴に、水平条線による水面と芦を篦押しで表す。鋳肌はなめらかで光沢のある鯰肌。ただし羽の上面は荒れ肌とする。肩に鷹掛け舟形の鐶付を設ける。一方の鐶付下に「和銑　一圭」の款記あり。内面に中子の撫目の痕を残す。内面全体に漆を焼き付ける。蓋は唐金蓋。独楽形のつまみをつける。桐材の透木(9.1×1.8×1.4cm）二本が添う。別箱入りで常張鐶一双が添う。

（箱側面）「芦舟／透木釜／日刀保出雲たゝら和銑」「国家指定／釜師／一圭作（黒円印「角谷」）」（鐶箱蓋表）「常張鐶／芦舟透木釜／添／釜師／一圭作（黒円印「角谷」）」

角谷一圭（1904-99）は大阪で活動した釜師で、1984年に重要無形文化財保持者（人間国宝）に指定された。『人間国宝　角谷一圭茶之湯釜展』図録（1986年4月　日本橋三越画廊）掲載。風呂敷に定三の「常張鐶添／角谷一圭／芦舟透木／釜」の墨書。

99 宝珠釜（ほうじゅがま）

昭和時代　20世紀
1口　鉄鋳造
総高17.8　身高15.8　口径11.0　胴径21.8
幅22.0　鐶付長3.4
M1486（和銑宝珠形釜）

口造は姥口。丸釜で、胴下半にアールデコ風の八葉蓮華を表し、宝珠に見立てた形。八葉蓮華は単純化した連弧形で、三条一組の細隆線を各弁の左右に表す。鋳肌は縮肌風の荒らし肌。一方の鐶付下に「博行」の款記あり。鐶付は兎形。内面は漆焼き付けを行う。蓋は唐金蓋で、蕾形のつまみをつける。

（箱側面）「宝珠釜／博行（黒円印「酒井」）」

酒井博行。大阪で活動。日本伝統工芸会に出品。風呂敷に「酒井博行／和銑／宝珠形／釜」と墨書。

100 桐鳳凰文平丸釜（きりほうおうもんひらまるがま）

昭和時代　20世紀
1口　鉄鋳造
総高17.4　身高15.1　口径11.3　胴径25.8
幅26.4　鐶付長2.7
M1176（桐鳳凰文平丸釜）

姥口の平丸釜。一方の面に尾の長い鳳凰、もう一方の面に五七の桐を薄肉の篦押しで表す。鋳肌は石目状を呈するも、総体に艶を持たせる。わずかに挽目を残す。鐶付は宝珠形で、孔を完全な正円とする。内面の肩部に中子の撫目の痕を残す。内面全体に光沢あり。蓋は唐金蓋。縦方向に長い透かしを入れ、数条の水平沈線をめぐらした球形のつまみをつける。

（箱側面）「桐鳳凰文／平丸釜／誠（黒円印）」

手塚誠。日本伝統工芸展に出品。本品は『人間国宝　角谷一圭茶之湯釜展』図録（1986年4月日本橋三越画廊）に掲載。風呂敷に定三の「手塚誠／桐鳳凰文／平丸釜／和銑」の墨書。

101 扇面散釜（せんめんちらしがま）

昭和時代　20世紀
1口　鉄鋳造
総高19.3　身高16.5　口径12.1　胴径26.5
鐶付長2.3
M1178（扇面霰釜）

車軸釜風の肩に四段の刳りをめぐらす。口造は輪口。胴から肩に扇面を六面散らす。各々に笹、梅、陰陽の珠文を配した市松、霰、四弁花、三階菱を、薄肉の篦押しや型押しで表す。鋳肌は石目状の荒らし肌。一方の鐶付の下に「烈」の款記あり。鐶付は幅広の山形（側面に四条の細い隆帯を表し、根元に小粒の珠文を十個前後表す）。蓋は唐金蓋。扇面を透かした扁平球形のつまみをつける。

（箱蓋表）「扇面散釜」（箱蓋裏）「烈（朱方印）」

長野烈（1945-）。長野垤志に師事。日本伝統工芸展に出品。風呂敷に定三の「長野烈／イサオ（ツヨシ）／扇面流／釜」の墨書。

102 甑口釜（こしきぐちがま）

昭和時代　20世紀
1口　鉄鋳造
総高19.8　身高17.5　口径12.4　胴径25.1
幅26.0　鐶付長3.3
M1177（甑口窯釜 丸地文）

口造は上方に向かって内傾する甑口。尻張形で胴の下端と底の境をやや鏑立て強調する。肩に二条の細隆線をめぐらす。胴に大型の円形文を散らす。鋳肌はざらつきを強調した石目状の荒らし肌。円形文の表面には挽目を明瞭に残し、鋳皺も認められる。鐶付は二枚貝形。内面は厚く漆を焼き付ける。蓋は唐金蓋。上面に七宝文を透かした独楽形のつまみをつける。

（箱蓋表）「和銑／甑口釜／菊地幸雄（朱方印「幸雄」）」

菊地幸雄。山形県美術協会員。日本伝統工芸展に出品。風呂敷に定三の「菊地幸雄／甑口釜／丸地文」の墨書。

103 虫喰鐶（むしくいかん）

江戸時代前期　17世紀
１双　鉄鍛造
径8.0　太さ0.3～0.5
M1171（虫喰鐶）

全体に捩りを加え、所々に虫喰状のくぼみを表した鐶。

（蓋紙）「九兵衛／蟲喰鐶」（内箱蓋表）「銕虫喰鈑」（内箱蓋裏）「銕虫喰鐶／右寛文歳時代九兵衛／作無紛者也／丙午／仲冬日／御釜師／大西浄雪（黒円印「大西」）」（外箱蓋貼紙）「九兵衛／虫喰鐶」

九兵衛は、京都の釜師西村九兵衛。千宗旦の釜師。浄雪は、京都三条釜座の釜師大西家十代（1777-1852）。風呂敷に定三の「九兵衛／蟲喰鐶」の墨書。

104 石目鐶（いしめかん）

江戸時代　19世紀
１双　鉄鍛造
径8.6　太さ0.4~0.65
M2929（鐵石目鐶）

（蓋紙）「鐵石目鐶／釜師／浄雪造」（内箱蓋表）「鐵石目鐶／釜師／浄雪（黒円印「大西」）」（外箱蓋表貼紙）「浄雪作／鐵石目鐶（黒円印）」

（内箱蓋表）「鐵石目鐶／釜師／浄雪（黒円印「大西」）」（外箱蓋表貼紙）「浄雪作／鐵石目鐶（黒円印）」（蓋紙）「鐵石目鐶／釜師／浄雪造」

浄雪は、京都三条釜座の釜師大西家十代（1777～1852）。

105 石目鐶（いしめかん）

江戸時代後期　19世紀
１双　鉄鍛造
径8.2　太さ0.4~0.6
M1172（鉄石目鐶）

やや扁平で随所にざらつきのあるくぼみをつけて石目を表現する。表面を黒色処理するが、地の多くが露出する（意図的表現かは不明）。

（蓋紙）「鐵石目鐶釜師浄壽／文久紀元歳次辛酉春／三月求于平安／清咏亭什／／寸圭」（箱蓋表）「鉄石目鐶／釜師／浄壽（黒円印「大西」）」

浄寿は、京都三条釜座の釜師大西家11代（1808-1875）。風呂敷に定三の「浄壽／鉄石目鐶」の墨書。

106 常張鐶（じょうはりかん）

江戸～明治時代　19世紀
１双　鉄鍛造
長径7.1　太さ0.4~0.7
M1490（常張鐶）

全体にねじりを付けた角棒を輪にして一方の先を直角に曲げる。表面に黒色処理する。

（蓋表貼紙）「金□徳元/鉄常張鈥」

107 砂張鐶（さはりかん）

明治～昭和時代　19-20世紀
１双　鉄鍛造
径7.4　太さ0.2～0.65
M1173（砂張鐶）

両面に太い樋をめぐらす。外側内側にごく細かな鎚目を残す。全体に茶味がかった色調に仕上げ「砂張」の質感を表現するか。

（箱蓋表）「利休所持写／砂張換鐶／中川浄益（黒円印）」（蓋紙）「利休所持寫／砂張鐶」

中川浄益は千家十職に連なる京都の金工師で、紹益を初代に、二代以降浄益を名乗り、十一代まで続く。風呂敷に定三の「利休所持写し／砂張鐶」の墨書。

108 鉄捻鐶（てつねじりかん）

江戸～明治時代　19世紀
１双　鉄鍛造
径8.3　太さ0.5
M1174（鉄捻鐶）

緩やかに捻じりを加え所々に虫食い状のへこみを作り出す。全体にやや茶味がかった黒色処理をする。

（箱蓋表）「鉄捻鐶」（箱蓋裏）「鉄捻鐶／右者金盛徳元作／無紛者也／御釜師大西浄長（黒円印「大西」）／戊寅／初冬日」

浄長は京都三条釜座の大西家十三代（1866-1943）。

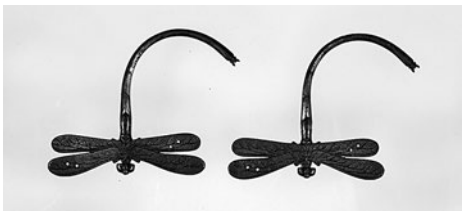
109 銀象嵌轡鐶（ぎんぞうがんくつわかん）

江戸時代中期　18世紀
1双　鉄鍛造、象嵌
縦13.5　横8.6　立聞輪径5.3
M1245（鉄轡鐶）

轡形の釣鐶。鏡板の田の字部分に丸に十字形と破線、立聞の側面に、唐草を銀の布目象嵌で表す。

（箱蓋表）「鐵轡鐶」（箱蓋裏）「象眼入／鐵轡鐶／右は 宝暦年時代浄玄作／無紛者也／壬申／季秋日／御釜師／大西浄長（黒円印「大西」）」（箱紐木札表）「浄玄作／象眼入／鉄轡鐶（同裏）「を／六」

浄玄は京都三条釜座の釜師大西家七代（1720-1783）。浄長は同十三代（1866-1943）。風呂敷に定三の「浄玄作／銀象眼／鉄轡鐶」の墨書。1987（昭和62）年10月11日の上飯田小茶会に使用。



110 象嵌蜻蛉鐶（ぞうがんとんぼかん）

江戸時代　18-19世紀
1対　鉄鍛造
全長7.6　羽幅8.1
M1599（象眼蜻蛉鐶）

蜻蛉の羽、頭体、足を別作りし、組み合わせる。羽の上面には毛彫り鏨で細かく羽紋を表す。体部には各節ごとに銀線を象嵌し、体紋を表す。一方に「明珍」もう一方に「政幸」と銘を刻む。

（箱蓋表）「明珍／象眼入／鈑／とんぼ」

明珍政幸は越前明珍家の甲冑師で、福井藩の抱え工。江戸中期に活動。風呂敷に定三の「政幸／明珍／蜻蛉鐶」の墨書。

111 唐銅乙御前風炉（からがねおとごぜふろ）

江戸時代前期　17世紀
1口　銅鋳造
総高22.8　口径26.9　胴径35.6　幅41.5
鐶付長10.7
M1148（唐銅乙御前風炉 五徳付）

口がやや下方へ下がり、胴が豊かに張る乙御前形の風炉。口縁・火口の透かしの縁を覆輪状に作る。火口は逆洲浜形。背面に洲浜形透かしを二つ開ける。鐶付は雲形（胴と一鋳）。脚は象鼻形（胴と一鋳）。外底にスを多く認める。脚の内側に鏨彫りによる圏線を一本めぐらし、その内側に轆轤回転により湯口等の痕跡を削り取った跡を認める。また、放射状の工具痕（磨きか）の痕跡も認める。地金は黄味を帯びた銅色。表面に黒漆を塗り、光沢がある。五徳が添う。

（箱蓋表）「唐銅乙御前風炉」（箱蓋裏）「唐銅乙御前風炉／一胴径　壱尺壱寸九分／一口廣　九寸分／一鐶附　雲／但象鼻足／右（は） 寛文年時代浄清作／無紛者也／辛巳／立秋日／御釜師／大西浄長（黒円印「大西」）」（箱側面貼紙）「浄清作／唐銅／乙御前風（朱長円印「淡如水」）」

浄清は京都三条釜座の釜師大西家二代（1594-1682）。浄長は同十三代（1866-1943）。貼紙の墨書は定三による。1975（昭和50）年５月５日の利休流無作法茶会に使用。

112 鹿柄象眼火箸（しかえぞうがんひばし）

江戸時代　17-18世紀
１具　真鍮鍛造
全長29.1
火箸径0.4　柄径1.2　柄長13.5
M1592（唐物鹿柄象嵌火箸）

柄を鹿角材で作った火箸。箸本体は真鍮製。断面八角形。先端近くに交互に斜行する滑り止めを削り込む。根元には二条の隆帯を挟二段の膨らみを付ける。柄との境に真鍮の小刻座を挟む。

柄は三条一組の撚線状の象眼文様を二から四段表す。各撚紋は中央帯が金二個、銀一個を交互に用い、両側帯はすべて金とする。

撚線紋帯の間には直線状あるいは波行する連珠文を表す。各種紋は凹線もしくは撚線紋で縁取り、中心に赤もしくは緑の漆を塗る。柄尻には真鍮製の菊花刻み金具を打つ。

（箱蓋表貼紙）「唐物／鹿柄象眼ばし/萬暦時代」と定三の墨書。

113 名古屋城古釘火箸（ばごやじょうふるくぎひばし）

昭和（原型江戸）　20世紀
１具　鉄鍛造
全長32.5　経0.5×0.5
M1547（名古屋城古釘火箸）

名古屋城の瓦を留めたと伝える釘を火箸に仕立てる。角釘で頭を薄く延べ叩いて折り曲げる。持ち手として笹の葉を糸で留める

（箱蓋表）枠内に『城』字の焼印　（蓋裏）「名古屋城古瓦釘／義親（印）」（箱底）「八十二翁／甫斉（印）」。定三の「名古屋城古釘火箸　八十二翁/甫斉」と墨書する添紙入り。三葉葵紋金箔押し紫絣地の箸袋が添う。

長谷川甫斎は明治から昭和にかけ三代続く指物師。

114 火箸（1）

「炉・風炉火箸　灰匙」の内

昭和時代　20世紀
１具　鉄鍛造
長28.9　径0.4~0.7
M1546-1（炉・風炉火箸 灰杓子（利休形石月鐶一不在））

頭は涙滴形の透かし。先細りで滑り止めに円形のくぼみをつける。表面を黒色仕上げ。

蓋表「利休形／炉　風炉火箸／仝　灰杓子／利休形石目鈸／中川淨益（黒印）」

中川浄益は千家十職に連なる京都の金工師で、紹益を初代に、二代以降浄益を名乗り、十一代まで続く。

115 火箸（2）

「炉・風炉火箸　灰匙」の内

昭和時代　20世紀
１具　鉄鍛造
全長29.1　径0.35~0.7
柄径0.85
M1546-2

先細りで滑り止めに小判形のくぼみをつける。黒色仕上げ。柄は桐製素文。箸の差し込み部を鉄針金で縛る。

116 灰匙（1）

「炉・風炉火箸　灰匙」の内

昭和時代　20世紀
1本　銅鍛造
全長21.3　匙幅6.0　柄長13.2　柄径1.0
M1546-3

幅広の灰匙。黒色仕上げ。柄は唐木製、断面十二角形。匙の差し込み部を真鍮針金で縛る。

117 灰匙（2）

「炉・風炉火箸　灰匙匙２」の内

昭和時代　20世紀
1本　銅鍛造
全長21.0　柄部長14.0　匙幅3.9　柄径0.6
M1546-4

柄まで一体に作る。全体を黒色仕上げ。柄に笹の葉を巻き三カ所で糸で留める。

118 鉄七宝透象嵌火箸（てつしっぽうすかしぞうがんひばし）

明治時代　19世紀
1具　鉄鍛造　銀象嵌
長28.3
M2322（菊頭透象嵌入火箸）

箸の中程を七宝透かしとした鉄火箸。その上下の隆帯と上端近くの帯に連珠を銀象嵌する。上端は蕾上に作る。

（袋）「きくかしら透象眼入火はし」

119 龍飾銅匙（りゅうかざりどうさじ）

江戸～明治時代　19世紀
1本　銅鋳造
長24.3　匙部長9.2　匙部幅4.0
M1597（南蛮龍首砂張匙）

匙面は長楕円形に作り、端を大きく曲げて龍頭を作り出す。鉢の部分は鍍錫の可能性あり。全体に砂張様を呈する。蛍光X線分析によれば、金を若干含む銅製であることが確認された。

（箱蓋）「南蛮ものさし／口　弐番」（紙蓋）「南蛮龍首砂張匙」

120 唐草文銀象嵌釜鎖（からくさもんぎんぞうがんかまくさり）

江戸時代　17世紀
1筋　鉄鍛造
全長203.0
M1170（古作銀象嵌釜鎖）

両端を花先形とした八双板と瓢箪形鐶を交互に繋いだ釜鎖。八双板の両面には、ごく細い銀象嵌で唐草文を表す。文様部分は幅広の鏨で細かく平行条線を打ち、細い銀線を貼り付ける。布目象嵌に似た技法による。

（箱側面貼紙）「古作／銀象眼入／釜くさり／（朱書）「□第六十六号」（箱底）「元禄五年（一六九二）／造之」

釜鎖の製作年とみていい。風呂敷に定三の「古作／銀象眼／釜鎖」の墨書。

121 釣鎖（つりくさり）

江戸時代　18-19世紀
1筋　鉄鍛造
全長180.3
M1169（釣鎖）

鏑は楕円形で、両端の内側を少しくぼませて鏑同士が掛かりやすくする。

（箱蓋裏）「釣くさり　明珍政幸（黒円印「明珍政幸」）」

明珍政幸は越前明珍家の甲冑師で、福井藩の抱え工。江戸中期に活動。風呂敷に定三の「明珍作／釣くさり／共箱」の墨書。

122 登龍銀象嵌釜釣（のぼりりゅうぎんぞうがんかまつり）

江戸～明治時代　19世紀
1本　鉄鍛造　銀象欵
縦24.8　横22.4　厚0.4
M1244（金銀象嵌登龍釜釣）

龍が巻き付く様と飛雲を銀の布目象嵌で表す。特に龍の髭を金象嵌で表す。表裏の図様は異なる。表面を黒色に仕上げる。

（箱蓋表）「登り龍巻／鉄象眼入釜釣　明珍造」（箱蓋表貼紙）「明珍作／金銀造嵌／釜蔓／（朱書）一号」（木札）「明珍／象嵌釜釣（裏に方印）」

風呂敷に定三の「明珍在銘／金銀象眼／登龍／釜釣」の墨書。

123 古銅糸管蓋置（こどういとくだふたおき）

江戸時代　18-19世紀
1個　銅鋳造
総高4.8　縦4.8　横5.0　管径0.85
M1430（古銅糸巻形蓋置）

管両端の口縁のみ鍍金。五本の管の上下を、五葉形の鐶で繋ぐ。管は上下端を潰した感じの覆輪状に造る。管側面には亀甲文を表す。鋳造は蠟型による。亀甲文を表した蠟板を巻き、内側で接合して管にする。一部に大きなスを生じ、管内に中子土を残す。地金はやや緑がかった暗茶色。

（箱蓋表）「古銅　蓋置／糸管」（箱側面貼紙）「百七十四」

仕覆が添う。箱は塗箱で箱表書は銀蒔絵による。風呂敷に「金紫銅／糸巻／ふた置」の墨書。

124 かきつばた蓋置（ふたおき）

昭和時代　20世紀
1個　銅鋳造
総高5.0　縦5.7　横6.6
M1584（かきつばた蓋置）

全体を暗茶色に仕上げる。杜若の花を写実的に象った蓋置。蠟型鋳造による。花弁の表側は全体にざらつき感を出し、数条にわたり縦方向に撫で線を入れ、弁脈を表す。花弁裏は滑らかな肌に仕上げ、三弁のうち一弁に「裕」の字を刻む。萼と蕊は蠟材をこねて形作る。質感を表すのに指紋を意図的に残す。

（蓋紙）「蓋置　かきつばた／長野裕作」（箱蓋表）「蓋置　かきつはた」（箱蓋裏）「裕（方印長）」

長野裕（1941-）。長野垤志の次男。日本伝統工芸展に出品。2001年に二代長野垤志を襲名。蓋紙の墨書は定三による。

125 鉄雲龍蓋置（てつうんりゅうふたおき）

大正～昭和時代　20世紀
1個　鉄鋳造
高さ5.1　口径4.5　幅5.3
M1431（雲龍鉄蓋置）

茶湯釜の雲龍釜を象った円筒形の蓋置。正背面に雲・龍・雨を鋳出す。鐶付は鬼面。

126 三ツ獅子面蓋置（みつししめんふたおき）

明治時代　19世紀
1個　銅鋳造
高さ4.7　口径4.2　底径6.0
M1585（古銅三ツ獅子文蓋置）

三脚部に鬼面を薄肉に鋳出した蓋置。胴の三方に環状の耳を設ける。鼻下に円形の小口をあける。

（蓋表）「三ツ獅々面蓋置」（箱側面貼紙）「唐獅子ふた置」

127 砂張棒の先水指（さはりぼうのさきみずさし）

江戸時代　18-19世紀
1口　銅鋳造
総高15.0　口径13.8　胴径15.3　底径12.8
M1183（砂張水指）

やや上方に直線的に広がる棒の先形の水指。精緻な轆轤削りを施す。口は内側に短く折り曲げる。肩の直下に沈線を一条めぐらし、わずかに肉を取った隆帯をめぐらす。外底を含む外面全面を丁寧に磨き仕上げる。地金はやや黄色味を帯びた薄茶色。

（箱蓋表）「砂張　水さし」（箱前側面）「砂張　水指」（同貼紙）「（朱書）水指／古」（箱後側面）「さはり　水指」

「棒の先」は、神輿を支える轅棒の先に付ける筒状金具の形にちなむ呼称で、室町時代末頃から建水の呼称として登場する。風呂敷に定三の「砂張／水指」の墨書。

128 棒の先建水（ぼうのさきけんすい）

江戸時代　17-18世紀
1口　銅鋳造
総高12.3　口径12.4　底径9.4
M1375（砂張棒の先建水）

わずかに上方へ広がる体部と急に広がる口縁からなる棒の先形の建水。口縁は上端を平坦（中央がややくぼむ）に作り、内側をごくわずかに張り出させる。内外面ともわずかに挽目を残す。底と体部の境は丸味を持つ。底はわずかに膨らむ。地金は暗茶色の古色を帯びる（砂張ではなく青銅）。全体に暗緑色の錆が覆い、樹脂状の被膜あり。体部の下端から外底にかけ液につかり発生したように見える厚い緑青が覆う。

（箱蓋表貼紙）「棒の先／建水」（箱側面貼紙）「棒の先建水／No.04355」

「棒の先」は、神輿を支える轅棒の先に付ける筒状金具の形にちなむ呼称。定三は風呂敷墨書で「さはり（砂張）」と称するが、蛍光X線分析でも錫は含まれず、銅を主成分に鉛を検出した。紫外線観察では、緑青部分の差異が見られない。風呂敷に定三の「さはり／棒の先／建水」の墨書。

129 砂張鉄鉢形水指（さはりてつはちがたみずさし）

江戸時代　18-19世紀
1口　銅鍛造
総高10.9　口径21.7　胴径22.0　底径6.5
M1181（砂張鉄鉢水指）

平底の鉄鉢形で、口縁を端反とした水指。口縁外面は覆輪状にわずかに肥厚させる。胴のくびれの内側に鎚目をわずかに残し、口縁を外方に折り曲げた際の細かな亀裂も観察される。地金はやや黄色味を帯びた薄茶色。内外面は細かな鎚目状の斑を残して薄墨色の着色を施す。

（箱蓋表）「砂張鉄鉢　水指」（箱側面貼紙）「砂張鉄鉢水指」

風呂敷に「砂張鉄鉢／水指」の墨書。

130 銀象嵌鉄鉢形建水（ぎんぞうがんてつはちがたけんすい）

桃山時代　16-17世紀
1口　銅鍛造
総高6.3　口径16.3　胴径16.7　底径6.5
M1376（銀象眼鉄鉢建水）

口縁が立ち気味に窄まる平底の鉄鉢形建水。口縁にあえて整然としない割付の雷文と、南蛮風の唐草を銀線による布目象嵌で表す。内面に細かな鎚目を残す。

（蓋紙）「銀象眼／鉄鉢建水」（箱蓋表）「象眼　こほし」（箱側面貼紙）「第九號／時代鐵／象眼建水」

「こほし」は建水の古称。蓋紙の墨書は定三による。風呂敷にも定三の「銀象眼／鉄鉢建水」の墨書。1968（昭和43）年３月４日の利休流無作法茶会に使用。

131 砂張深鉢（さはりふかばち）

江戸～明治時代　19世紀
1口　銅鍛造
総高6.4　口径12.1　底径3.8
M1323（砂張菓子器）

立ち上がりが丸味を帯びた小型の深鉢。底は内側にやや盛り上げる。器壁はごく薄い（厚さ0.4mm）。表面を丁寧に研磨し仕上げる。地金は黄色味を帯びた銅色。鍍金下地に鍍銀を施し、砂張色に着色する。蛍光X線分析により、銅に微量のヒ素、金、銀を含むことが確認された。

（箱蓋表貼紙）「茶箱用／砂張菓子器（朱長円印「淡如水」）」

貼紙の墨書は定三による。

主要検出元素：銅
その他の検出元素：金、銀、ヒ素

132 砂張盤（さはりばん）

江戸時代　17-18世紀
1口　銅鋳造
総高2.9　口径17.7　底径12.2
M1322（砂張菓子器）

幅狭の鍔を持つ広底の盤。菓子器として用いた。内外面全体を轆轤削り仕上げとする。内面は丁寧な磨き仕上げ。外面は挽目をよく残す。鍔はやや上方に折り曲げ、先端上面を覆輪状に表す。地金は黄色味を帯びた薄茶色。蛍光X線分析で、銅に錫と若干の鉛、ヒ素を含む響銅（佐波理、砂張）と確認された。

（箱蓋表貼紙）「砂張菓子器」

貼紙の墨書は定三による。風呂敷にも定三の「砂張／菓子器」の墨書。

主要検出元素：銅、スズ
その他の検出元素：鉛、ヒ素

133 砂張大海盆（さはりたいかいぼん）

江戸時代中期　18世紀
1口　銅鋳造後鍛造
総高4.0　口径39.2　底径28.8
M1530（砂張大海盆）

上方に広がる幅広の鍔を持つ大型の盆。口縁は上方に屈曲する。上端面にほぼ1cm間隔で二個一組で鏨を打ち込み、小刻様の装飾を行う。全体にわたり鎚起の跡を残す。見込みは極めて平滑ながら外底は中央に2×3cmの膨らみ（湯口か）を認め、一定方向の調整痕を残す。立ち上がりの外面付近は横方向の調整痕を残す。表裏全体に銅鑼と同様の微細に泡立ちざらついた肌を残す。地金はやや黄色味を帯びた薄茶色。全体にやや緑がかった暗灰色の色調を呈する。外底の所々に布目が錆化して残る。

（箱蓋貼紙）「大海盆」（箱側面貼紙）「□□□□□／すはり菓子盆」

風呂敷に定三の「砂張／大海盆」の墨書。

134 砂張小盆（さはりこぼん）

江戸時代　18-19世紀
1口　銅鋳造
総高1.3　口径16.1　底径16.1
M1534（砂張小盆）

広い見込みに口縁が短く立ち上がる小型の盆（本来の用途不詳）。見込みの中央に径3.7cmの圏線を刻む。また中心に径3mmの円形鏨を打ち込む。体部は内面が内湾しつつ立ち上がるも、外面は縁帯状に折り返し、幅広の外側面の中央をわずかに刳り込む形状とする。外底は数条一組の圏線を三条刻む。外縁に沿って軽い打痕を残す。地金はやや黄色味を帯びた薄茶色。全体にやや緑がかった暗灰色の色調を呈する。内外面とも極めて平滑に研磨し仕上げる。

風呂敷に定三の「砂張／小盆」の墨書。

135 銅水注（どうみずつぎ）

桃山～江戸時代　16-17世紀
1口　銅鋳造
総高21.6　身高14.1　口径10.7　胴径18.6
底径11.2
M1129（銅水注）

肩がやや張る薬壺形の胴に注口と把手を設けた水注。口縁は横に張り出し、内側に段を有する。頸は短く立ち上がる。注口は先へ向かって口を広げる。座は菊刻座とする。本体に三本の鋲と上端一箇所の枘でかしめ留める。把手の座は花先形で、鋲でかしめ留め、これに把手を半球頭の鋲で貫く。把手は子持ち三条形。底は丁寧な轆轤挽きで痕跡をわずかに残す。蓋は共蓋。扁平球形の鈕を作り出す。一条の円座をめぐらし、それに沿って一箇所湯気口を開ける。内面に轆轤挽きの痕跡を残す。全体にやや緑かかった暗茶色を呈し、注口付近に漆塗りを認める。

（箱側面貼紙）「足利時代／古銅水注」

貼紙の墨書は定三による。風呂敷にも定三の「室町／銅水注」の墨書。

136 金銅秋草文水注（こんどうあきくさもんみずつぎ）

江戸時代　18-19世紀
1口　銅鍛造　鍍金
総高25.0　身高15.2　口径9.8　胴径13.0
底径11.3
M1231（鍍金銅製菊花蝶々線彫水注）

筒形の水注。口は大きく開き、短く立ち上がる。胴に秋草文（菊・萩・薄、反対面に撫子・桔梗・薄）と蝶をやや太い蹴彫りで表す。注口は胴に蠟付けする。上面にわずかに鐔を立て、先をシャープに造る。取手は中空で上方に鐔を立てる。底はわずかに上げ底。蓋は蕾形の鈕を付け、蝶を対称位置に大きく蹴彫りで表す。銅地金は黄味がかる茶色。外面鍍金は、蹴彫り線内に認めないので、彫金後に箔鍍金を施し、線刻の銅色を強調した意図と判断される。内面は鍍錫を施す。

（蓋紙）「渡金／菊花蝶々線刻／銅製水注」（箱側面貼紙）「室町時代／蝶秋草水注（朱長円印「淡如水」）」

墨書はいずれも定三による。風呂敷にも定三の「室町時代／渡金菊蝶／水指」の墨書。

137 瓢鉄瓶（ひさごてつびん）

江戸時代　17-18世紀
1口　鉄鋳造
総高22.5　身高15.1　口径5.7　最大径13.0
底径7.2
M1238（瓢形鉄瓶）

瓢形の鉄瓶。口はやや大きくなだらかに短く立ち上がる。身の上半を細かな凹凸のある荒し肌とする。注口は細長く立ち上がり、先でわずかに広がるシャープな造作。把手は意図的に細かな凹凸をつける。両面の中央中ほどに縦方向の鋳型の継目らしい痕跡あり。底は替底の可能性あり。蓋は唐金蓋。三方に縦形の猪目形を透かした長胴形のつまみをつける。根元の円座には真鍮覆輪をめぐらす。上面に二条の緩い凹線をめぐらす。内面には同心円状の刻線を多数めぐらす。

（箱蓋表）「寒雉作／瓢鉄瓶」（箱側面）「加賀住寒雉作／ふくへ鉄瓶／山本蔵」（箱底）「小出氏」

宮崎寒雉は加賀金沢の釜師。風呂敷に定三の「寒雉／瓢形鉄瓶」の墨書。

138 鉄筒燗鍋（てつつつかんなべ）

江戸時代　18-19世紀
1口　鉄鋳造
総高17.6　身高11.2　口径4.5　胴径9.3
M1603（筒間鍋）

筒形で注口と把手の付く燗鍋。口は姥口。口から肩にかけ筋目をめぐらす。肌は縮れ肌。注口はU字形。把手は荒れた肌を表現し、半円形の座で前二箇所、後ろ一箇所固定する。底にごく小さな三脚を作り出す。底中央に径2.0cmの湯口痕を残す。蓋は共蓋。茸形のつまみを作り出す。中央がややくぼむ。

（蓋紙）「高橋因幡／筒間鍋」（箱蓋表）「筒間鍋／御釜師／高橋因幡（黒円印）」（箱側面貼紙）「因幡／間鍋」「間鍋」（箱底貼紙）「（朱書）因幡筒間鍋／丑七／月満天山／アマナキ」

高橋因幡は初代下間荘兵衛の弟子で、江戸後期に二、三代続いた。蓋紙の墨書は定三による。

139 般若心経彫鉄瓶（はんにゃしんぎょうほりてつびん）

1口　鉄鋳造
総高17.5　本体高10.3　口径7.6　胴径13.5
M1179（般若心経彫鉄瓶）

柔らかに肩の張った胴の全面に太い片切彫りで般若心経の経文を刻む。口は輪口。肩に太い円柱状の把手を作り出し、根元と上方に虫喰を表す。注口はごく短く作り出す。蓋は共蓋。下面に銀板を張る。つまみは半球形に近い山形で、茄子鐶を通す。

140 真形鉄瓶（しんなりてつびん）

江戸時代　18-19世紀
1口　鉄鋳造
総高16.8　本体高10.4　口径7.6　羽径12.5
M1239（鉄瓶）

茶湯釜の真形釜を写した鉄瓶。口は繰口。ゆるやかに張った肩にわずかな隆帯と段差を設け、腰に薄い羽をめぐらす。鋳肌は石目肌。注口は下膨らみ。肩に丸みをもった山形の耳を設け、把手を付ける。把手は鉄鍛造で表面に鋳バリ風の凹凸を見せて雅味を出す。蓋は真鍮製の唐金蓋。つまみは蕾形。

（箱蓋貼紙）「寒雉作／鐵瓶」（朱長円印「淡如水」）

141 銅丸形水注（どうまるがたみずつぎ）

江戸時代　18-19世紀
1口　銅鋳造
総高（把手）7.2　本体高7.1　口径2.7　胴径6.6
底径4.1　幅12.1
M2378（古銅　水注）

蓋のみ別造で、把手近くで蝶番により開閉する。身は平底の球胴形で、蓋に球形つまみを付ける。身の肩に二条線をめぐらし、その直下に蕉葉文を連ねる。注口はやや太めで根元に葉形の座を表す。身の肩の間を蕨手を付した波形で繋ぐ。把手は上方へ大きく張り、下端に鋲を表すも一鋳か。内底の一部に鋳欠の痕跡あり。

（箱書貼紙）「古胴水注」（朱文方印）

142 銅唐花蕉葉文方形大手炉（どうからはなしょうようもんほうけいおおてろ）

江戸～明治時代　19世紀
1口　銅鋳造
総高39.0　身高18.6　口縦25.8　口横25.9
幅40.7　奥行36.0　底縦25.7　底横25.7
M1316（青銅蝶唐草文手炉）

肩が張り、胴上半が大きく膨らんだ方形の大型手炉。口は短く立ち上がる。肩に、雷文地と唐花を表す蕉葉形を表す。把手は幅広の帯板状で、上面中央に五曜文を透かし、両側に縦帯を透かす。把手の座は打ち出しで、大型の蝶と箱形を造り出す。底に『大明/宣徳/年製』の款記を表す（縦2.4cm、横2.7cm）。側面の把手座斜め下に大きな鋳掛けあり。蓋は上面に火頭形の窓をあけ、地に三階菱の繋ぎ文を透かす。側面は隅丸長方形の窓に卍繋ぎ文を透かす。全体に黄土色に近い古色を呈する。鉄製三脚五徳を伴う。

（蓋紙）「在銘／宣徳年製／大手炉」（箱側面４面共）「仙徳年製／大手爐（炉）」（箱底）「明治十六癸未孟春／森喜兵衛／所持」

蓋紙の墨書は定三による。

143 金銅阿古陀形手焙（こんどうあこだなりてあぶり）

江戸時代　18-19世紀
1口　銅鍛造　鍍金
総高16.2　身高8.2　口径10.7　胴径14.0
底径10.9
M2287（鍍金阿古陀形手焙）

六窠形の阿古陀形につくる。身の正背面に四季花鳥図（梅若松に鶯、藤と菖蒲、楓鹿、雪持笹に鳥）を鍍金のネガ表現で表す。両側面に部分的な鍍金のポジ表現により水辺らしい図様を表す。口縁直下に七宝繋文を鍍金のネガ表現で表す。底は平底。把手は細い帯板状になる。蓋は蹴鞠形の火口窓をあけ、三方に梅鉢形の煙出を透かす。つまみは蔓形。全面に蔓草を鍍金のネガ表現で表す。

144 金銅秋草文手焙（こんどうあきくさもんてあぶり）

江戸時代中期　18世紀
1口　銅鍛造　鍍金
総高16.7　身高9.1　口径9.4　胴径15.1
M1246（秋草文金滅金手焙）

胴が膨らみを持つ円形の手焙。本体は肩から頸、胴、底を別の部材で作り、組み合わせる。肩と胴は側面に縦方向の継ぎ目を残す。肩の上半には細かな鎚目をよく残す。全面に秋草（菊、薄、桔梗、女郎花、朝顔、萩）をやや太く荒い蹴彫りで表す。把手は細い帯板状で、座は長方形の板状になる。底は二段に作り、内側を上げ底とする。

蓋は扁平な半球形。火頭形の火口をあけ、後方に扇形の煙出しを透かす。菊、桔梗と蝶を細い蹴彫りで表す。地金は素銅。大方の鍍金は摩滅する。

（蓋紙）「秋草模様／金滅金手焙」（箱蓋裏）「金滅金手焙」（箱側面貼紙）秋草模様／金滅金手焙（朱長円印「定」）」

蓋紙・貼紙の墨書は定三による。

145 菊花文四方手焙（きっかもんよほうてあぶり）

1口　真鍮鋳造
総高17.7　本体高12.4　身高10.0　口幅9.2
胴幅13.4
M1255（菊彫結手焙）

四方の器地の全面に菊花文を太い毛彫り、片切彫りで表した四方手焙。蓋は菊花を透彫り。乳脚。

（蓋裏）「菊彫結小手爐／金屋五郎三郎」（紙蓋表）「菊彫結手爐／五郎三郎／共箱」（紙蓋側面）「五郎三郎／共箱／菊彫結手爐」

風呂敷に「五郎三郎／菊彫結／手爐」と墨書。

146 銅龍耳四方細首花入（どうりゅうみみよほうほそくびはないれ）

江戸時代　17-18世紀
1口　銅鋳造
総高27.2　首高20.4　胴部高4.2　口縦2.45
口横2.45　幅（耳）6.3　胴縦5.85　胴横5.85
底縦4.0　底横4.0
M1444（古銅龍耳花入）

四方蕪形の胴に、当世具足の指物受筒の形に似る四方細首を立て、脚台を設けた花入。首、胴、脚台は別鋳か。口は角張らせた覆輪状とし、直下に龍耳をつける（本体に鑞付け）。脚台は、如意頭形花弁を五弁透かした脚を、方形・円形を重ねた台に乗せた形をなす。首四面の中程よりやや上寄りに0.7×0.1㎝の竿（明るい茶色）を設ける。胴の中央にも同様の竿（0.45×0.1㎝）を認める。地金は茶色で表面に漆をかけて黒っぽく仕上げる。

147 銅龍耳四方細首花入（どうりゅうみみよほうほそくびはないれ）

江戸時代　18-19世紀
1口　銅鋳造
総高27.6　首高20.2　胴部高4.8　口縦2.8
横2.9　幅（耳）6.7　胴縦5.7　胴横5.7
底縦3.9　底横4.0
M1271（古銅龍耳花入）

四方蕪形の胴に、当世具足の指物受筒の形に似る四方細首を立て、脚台を設けた花入。No.146の写し。胴高がNo.146より高い。首、胴、脚台は別鋳。口は角張らせた覆輪状とするが、No.146よりもやや丸味がある。直下に龍耳をつける（本体に鑞付け）。脚台は如意頭形花弁を五弁透かした脚を方形・円形を重ねた台に乗せた形をなす。地金は赤味を帯びた茶色で全体に灰色がかった暗茶色に仕上げる。No.146に見られた竿は認められない。

（蓋紙）「古銅龍耳花入」（箱側面貼紙）「古□花入」
蓋紙の墨書は定三による。

148 瓜形花入（うりがたはないれ）

江戸時代　17-18世紀
1口　銅鋳造
高さ9.6　口径1.7　胴径4.3　底径3.3
M2508（銅華瓶）

胴を六花形の瓜形に造った小型の花入。肩に七葉の萼を象った張り出しを設ける。頸は六角形で、口縁に覆輪をめぐらす。底は嵌め底。地金は暗茶色で、表面に黒漆を塗る。

（箱側面貼紙）「華瓶」

149 銀象嵌筒形香炉（ぎんぞうがんつつがたこうろ）

江戸時代または中国・清時代　18-19世紀
1基　鉄鍛造
総高9.1　口径11.0　幅（脚先）11.4　底径10.8
M1370（銀象眼三童子文鉄香炉）

厚い鉄板で筒形に造った香炉。脚は別造の唐子形脚を枘留めする。底は嵌め底で銅系の鑞材による緑青を認める。身の上縁に添ってＳ字文を波形に太い線刻で表す。その間に細い唐草を銀の布目象嵌で表す。身の下辺には雨龍をやや細い線刻で表す。唐子の着衣も線刻で表す。全体に鉄錆を生じる。

1975（昭和50）年５月５日の利休流無作法茶会に使用。

150 銅兎形香炉（どううさぎがたこうろ）

江戸時代　17-18世紀
1基　真鍮鋳造
総高16.7　身高10.6　口径4.5　胴幅7.3×8.5
M1369（銅兎香炉）

兎の首を蓋、胴を身とした香炉。首の喉元で身と蓋を蝶番繋ぎとする。口を煙出とする。身の全体に暗い金色を呈する。蓋の下辺に首輪を表す凸帯をめぐらし、表面に斜行条線を毛彫りする。目は鋳型で表すが、眉や鼻・髭・耳の縁取りなどを細かな毛彫りで表す。臀部の畳付に若干のスあり（湯口か）。尾はごく短い。周辺に薄い緑青が広く発生する。

（箱蓋表）「桃山時代／兎香籠」（箱側面）「桃山時代／うさ子」

箱書は熊谷守一による。風呂敷に定三の「桃山／兎香炉／銅」の墨書。

151 銅鷺形香炉（どうさぎがたこうろ）　附唐草蒔絵伏籠（つけたりからくさまきえふせご）

江戸時代　17-18世紀
1基
（香炉）　銅鋳造
総高18.2　幅14.1　奥行7.3
M1524-1（鷺形香炉）

香炉は蠟型鋳造によるか。片足を上げ、一本脚で立つ鷺を象った香炉。蓋は三箇所羽を反り上げて煙出とする。羽毛などの細部は原型に表される。腹部に湯口らしい円形のスを認める。全体に暗茶色を呈するが、腹部の斑文様は意図的な着色によるか。

（香炉箱蓋貼紙）「古銅／鷺香炉（朱長円印「淡如水」）」（同側面貼紙）「本／第伍十番」（同紐木札）「時代銅／鷺香炉」（伏籠箱蓋表墨書）「御ふせかう」（同貼紙）「蒔絵縁金網／鷺香炉／ニ添（朱長円印「淡如水」）」

香炉箱・伏籠箱の蓋貼紙墨書は定三による。風呂敷に「香炉／鷺形／伏籠」の墨書。

（伏籠）木造　黒漆塗　蒔絵
縦20.5　横20.3　高20.3
M1524-2（伏籠）

伏籠は木造、黒漆塗。金蒔絵で細かな唐草を表す。唐草の先端は南蛮唐草風に波打つ。要所の蝶番金具は金銅製。唐草を蹴彫りして細かな魚々子を打ち詰める。

152「心月輪」鍋形香合

大正～昭和時代　20世紀
1合　銅鋳造
総高2.2　身高1.6　口径6.2　底径4.1
M1573（「心月輪」鍋形香合）

三足付きの鍋と蓋を象った香合。蓋の天井に良寛書とする「心月輪」の字を刻み、地は木目を鋳出する。蓋裏に「浄親」の刻印あり。身は吊耳を設けた鍋形で、側面に筋目を表す。肌は荒れ肌。底にごく小さく半円形の三足を作り出す。地金は暗茶色で、外面を黒褐色に着色する。内面は黒く着色する。

（蓋紙）「良寛書／「心月輪」／鍋蓋香合／御釜師／堀政五郎作」（箱蓋表）「良寛書／新月輪香盒（瓢形焼印）」（箱蓋裏）「鍋蓋香盒／十代目／御釜師／堀政五郎（黒円印「浄親」）」（箱側面貼紙）「鍋香合」「（朱書）茶／第五十八号　（墨書）良寛書／心月輪香合／政五郎作／共箱」「香／二十五号」

蓋紙の墨書は定三による。風呂敷にも定三の「良寛／心月輪／鍋香合」の墨書。

153 銅蓮香合

江戸時代　17-18世紀
1合　銅鋳造
総高4.2　身高2.7　口径7.3　底径5.2
M1511（銅製蓮香合）

銅鋳造。蓋と身に蓮華の意匠を表した受口式の香合。蓮弁は素弁八葉で中央はゆるやかに鎬立つ。間弁は剣頭形。蓋の天井を蓮肉とし、一＋六個の蓮子を表す。蘂は表現しない。

（蓋紙）「鎌倉／蓮香合」。（箱蓋裏）「ハチス／香合／□」。

蓋紙の墨書は定三による。風呂敷に「銅製／鎌倉／蓮香合／守一箱」墨書。

154 錫鳥形香合（すずとりがたこうごう）

江戸～明治時代　19世紀
1合　錫鋳造
総高3.3　身高1.5　幅5.9　奥行3.5
M1514（錫鴨香合）

鳥を簡略に象った錫製香合。蓋は印籠蓋造。目は魚々子鏨で表す。底は平底。

（風呂敷）「錫／鴨香合」

煎茶道具・文房具・その他

155 稜花形茶心壺（りょうかがたちゃしんこ）

江戸～明治時代　19世紀
2口　錫鍛造
総高10.0　身高9.8　口径4.1　胴径7.1
M1559（錫茶心壷）

稜花形で筒形の茶心壺。口から肩、胴、底板、脚を各々別の部材から造り、接合する。蓋は内側に一枚の受けを造り出す。

（蓋表貼紙）「錫／茶筒」

156 筋文茶壺（すじもんちゃつぼ）

明治時代　19世紀
1口　錫鋳造
総高8.0　身高7.7　口径3.3　底径5.9
M1560（錫茶筒）

撫肩で全面に横筋を引いた茶壺。中蓋１枚あり。蓋は被蓋式で上面が庇状に張り出し、同心円を表す。底は中を一段削り込み、中央に「藤上作」と銘を刻む。

（蓋表）「錫茶器／天下一藤上作」（蓋裏）「藤上作如／此形式平／生写所見／也　蔵六観（朱長円印）」（箱側面）「藤上作 リスイ／茶壷（朱長方印）」

藤上については不詳。秦蔵六は、千家十職に連なる金工師。幕末期に活動した初代以来、同名を襲名。鋳金を得意とする。風呂敷に定三の「藤上作／錫茶壺」の墨書。

157 六花形茶托（ろっかがたちゃたく）

江戸時代または中国・清時代　18-19世紀
5枚1揃　錫鋳造
径0.5　高2.2　底径3.2
M1568（錫六花形茶托 5客）

表裏とも丁寧な轆轤削りを施した後、六方を上方に曲げて六花形とする。底は下方に向かい狭くなる。外底に「源成」の款記あり。

（蓋紙）「錫茶托」（箱底）「壱」

蓋紙の墨書は定三による。風呂敷にも定三の「錫／茶托」の墨書。

158 稜花形茶托（りょうかがたちゃたく）

江戸時代または中国・清時代　18-19世紀
5枚1揃　錫鍛造
縦6.5　横11.0　高1.9　底径3.5
M2837（錫茶托　5客）

横長の稜花形茶托。見込みは正円形。外底は平板。縁はわずかに上方へ立ち上がる。外底に「益大字號」の款記あり。

（箱蓋表）「錫茶托」（箱蓋裏）「古錫木瓜式茶托益大字號／此器製作質朴な古色／清極光澤琳ゝ可𢌞也／己未ノ有日／蔵六生観（朱方印）」（箱側面貼紙）「改五八」「津」

秦蔵六は、千家十職に連なる金工師。幕末期に活動した初代以来、同名を襲名。鋳金を得意とする。

159 犬水滴（いぬすいてき）

明治時代　19-20世紀
1個　真鍮鋳造
幅9.0　奥行3.8　高5.7
M2334（古銅　犬水滴）

前脚を折ってしゃがむ子犬を象る水滴。口を注口とする。背に水口の孔を設ける。尾は屈曲させ環状に作る。底に楕円形の埋金。全体に暗茶色の着色。

風呂敷に定三の「室町／犬水滴」の墨書

160 水鳥水滴（みずどりすいてき）

江戸～明治時代　19世紀
1個　銅鋳造
幅7.3　奥行3.6　高4.2
M2335（古銅　小鳥水滴）

脚を折りたたみ水面に浮かぶ水鳥を象る水滴。嘴の左右に穴を二個あけ、嘴をつたって水を注ぐ仕組み。背の上に水口（径4.5㎜）をあける。目、羽などは太めの毛彫りで表す。尻部に素銅の埋金。

（箱側面貼紙）「室町／犬水滴」

風呂敷に定三の「古銅／水鳥／水滴」の墨書。

161 舟に唐子水滴（ふねにからこすいてき）

中国・清時代または江戸時代　18-19世紀
1個　銅鋳造
幅11.7　奥行4.5　高6.9
M2336（古銅　二人唐子舟乗り水滴）

小舟に乗る唐子二人を象る水滴。一人は舳先近くに座り、綱を手繰り寄せる。もう一人は中で腰を下ろし、籠に手をかける。舳先に注口をあけ、籠を水口とする。底に大きく埋金。全体に黒漆を塗る。蠟型鋳造による。

（蓋紙）「古銅水滴／二人唐子舟乗り」

蓋紙の墨書は定三による。風呂敷に定三の「古銅／二人唐子／舟乗り／水滴」の墨書。

162 琵琶人物水滴（びわじんぶつすいてき）

江戸時代　18世紀
1個　銅鋳造
幅11.8　奥行6.0　高3.7　琵琶胴厚1.3
M2337（古銅琵琶人物水滴）

琵琶とその胴に手を掛けた高士と唐子を一鋳で表す。水口は胴上面の尻寄りにあり（径3.5mm）、注口は棹の先に横向きに開く（径3mm）。胴の尻部に二箇所に開いた穴（中子土を取り出した穴か）を別材で鑞付けにより塞ぐ。1㎜ほどの穴があく。また、そこに2.4×0.7cmの長方形の凹みがある。弦を表す条線は鋳型で表すも、横帯状の七宝文や胴肩の三日月文、棹側面の雲文は毛彫・片桐彫で表す。地金は暗茶色を呈し、所々緑青が生じる。

（箱側面）「古銅／びわ人物　水入」（蓋紙）「古銅／琵琶高士水滴」は定三の墨書。（蓋裏貼紙）「吟松菴」

蓋紙の墨書は定三による。風呂敷にも定三の「古銅水滴／高士弾／琵琶」の墨書。

163 船形水滴（ふながたすいてき）

江戸～明治時代　18-19世紀
1個　銅鋳造
幅11.7　奥行4.3　高（舳先）5.6
M2338（素銅　船形水滴）

船体が三日月形に強く反り、前半部に屋形を設けた平底の船形水滴。屋形の口を水口とし三葉形の飾りを付けた舳先に注口をあける。本体は一鋳。後補部の天板は別板の可能性もあり。櫂の根元を屋形の上部に鋲留め鑞付けし、先も艫の上端に鑞付けする。櫂の根元には蕨手と葉形を表し、船体の形からも南蛮風の意匠としたものか。底と艫部の外側にスを認める。

（蓋表）「舟水入」
（蓋紙）「素銅／船形水滴」

蓋紙の墨書は定三による。風呂敷にも定三の「素銅／船形水滴」の墨書。

164 七宝瓢形水滴（しっぽうひさごがたすいてき）

江戸～明治時代　19世紀
1個　銅鍛造　有線七宝
幅9.3　奥行3.9　総高4.0　本体高1.9
M2340（七宝瓢形水滴）

注口を水鳥の頸のごとく長く伸ばし、胴を平板な瓢形とする水滴。全体を銅板を組み合わせて形造り、天井面に水口を設けて花唐草を有線七宝で表す。花は菊と桔梗の2種で菊を白､桔梗を黒（唐草の葉はすべて欠失。）桔梗は黒の七宝釉で表す。地は青味がかった緑色の釉。銅板は素銅。

（蓋表貼紙）「七寶／バイオリン水滴」
蓋表貼紙は定三の墨書。

165 尾長鳥水滴（おながどりすいてき）

江戸時代後期　18-19世紀
1個　銅鋳造
幅15.0　奥行5.0　高4.0
M2379（古銅　尾長鳥水滴）

尾長鳥の背に水口、嘴を注口とした尾長鳥形の水滴。羽は綾杉状に表す。肩の羽文も中央に刻点を入れる古様の表現。顔は眉上や目の出が強い独特の表現。全体に蠟原型による鋳造と見られる。両足のみ真鍮製で後補。

（蓋紙）「古銅／尾長鳥水滴」

166 七宝偏壺水滴（しっぽうへんこすいてき）

江戸～明治時代　19世紀
1個　真鍮鍛造　有線七宝
幅7.6　胴径5.9　胴厚2.2　高7.1
M2842-1（牛（２）、なす、兎、魚、切株、亀、太鼓二人唐人、偏壺、水滴□ 計10個）

本体・水口・注口・取手・台座などを真鍮板で別造し、組み合わせる。胴の両側面に矩形の器物文と花唐草文を真鍮線で表す。主文様内の釉は透明度がやや高い濃緑褐色で、背景はやや白濁気味の青色。七宝の表面は中央に向かってやや盛り上げる。全体に細かなスが顕著。胴側面は表面に皺状の肌を表す。

注口は鶴首状に細長く口先（長径６mm）が強く外反する。水口は円筒形（径９mm）。把手は細い幅の狭い胴板で造り、肩を四重の蕨手状に巻き込む。

167 三日月薄文水滴（みかづきすすきもんすいてき）

明治時代　19世紀
1個　銅鍛造
幅10.0　胴長径6.3　胴短径5.4　総高4.2
身高3.5
M2842-2

銅板を組み合わせて器体を作り、天井に銀板で作った三日月と薄を貼る。蕨手状の把手で短く口先（長径５mm）が外反する。

168 諫鼓水滴（かんこすいてき）

中国・清時代または江戸時代　19世紀
1個　銅鋳造
幅7.7　太鼓胴径4.9　奥行3.2　高7.2
M2842-3

大太鼓の上に鶏が乗り、左右に二人の唐子（一方が撥を握る）が立つ意匠を表す。頂の鶏脇に水口（長径5.5mm）をあけ、側面のやや斜め上方に樋状の注口を作り出す。全体を蠟型で一鋳に作る。

169 切株水滴（きりかぶすいてき）

明治時代　19世紀
1個　銅鍛造　鍍金
幅5.2　奥行4.5　高2.4
M2842-4

薄手の銅板を組み合わせ、彫金を施した株形の水滴。天井は蹴彫りにより木目を表し、鍍金を施す。側面は各種の鏨を用い、木肌を細かく写実的に表す。側面のみ茶色い着色を施すか。天井と胴の境目に注口（径2.5mm）をあけ、その反対側に水口（径２mm）を設ける。

170 茄子水滴（なすすいてき）

明治時代　19世紀
1個　銅鋳造
幅5.9　奥行4.4　高4.0
M2842-5

大きく膨らみ丸みを帯びた茄子を象る水滴。胴の中央に水口（径４mm）を設け、茎の方向に注口（径２mm）をあけて根元に花、蕾、葉、萼を鋳出す。底は平底で、中央に孔を設け、中子土を取り出した後に別板で埋める。

171 兎水滴（うさぎすいてき）

明治時代　19世紀
1個　銅鋳造
幅5.5　奥行2.9　高3.9
M2842-6

座った兎を象る水滴。背の中央に水口（径４mm）を開け、口を注口（径2.5mm）とし、頭から後ろに長く屈曲する耳、目、大腿部等を鋳出す。底面は均一。水口の孔から中子土を取り出したか。左耳根元を付け直した痕跡あり。表面の背中に細かな打痕を残す。全体に黒色を呈する。

172 水牛水滴（すいぎゅうすいてき）

江戸～明治時代　19世紀
1個　真鍮鋳造
幅10.8　奥行6.5　高(鼻先)4.1
M2842-7

足を前後とも折り曲げた水牛を象る水滴。背中に大きな水口（径10mm）を開け、縁に注口（径2.5mm）を開ける。角の模様は鋳造後に鏨で彫込むか。頭頂に放射状の擦痕を残す。

173 象水滴（ぞうすいてき）

江戸時代　18-19世紀
1個　銅鋳造
幅6.2　奥行4.9　高3.9
M2842-8

後ろ足を曲げて座り込み、首を大きく左方に曲げ、鼻を口元に屈曲した象を象る。蠟型鋳造によるが、眉上や鼻の刻線は鋳造後の鏨彫によるか。左耳の付け根に水口（長径４mm）を開け、と右耳の耳穴を注口（径2.5mm）とする。底に方形の大きな中子取り出し穴を設け、銅板を嵌め込みハンダで留める。表面に黒漆を塗ったか。

174 鯉水滴（こいすいてき）

明治時代　19世紀
1個　銅鋳造
幅11.0　奥行7.5　高5.1
M2842-9

胸鰭を大きく広げ、尾を手前に屈曲して口先を上方に尖らせた鯉を象る。鱗や鰭の線は蠟原型に表すも、目のみは鋳造後に細い毛彫で表す。背鰭脇に水口（径３mm）をあけ、口中に注口（径3.5mm）を開ける。底に方形の中子取り穴を開け、銅板を嵌める。

175「富貴長春」枕水滴（ふきちょうしゅん まくらすいてき）

中国・清時代　19世紀
1個　銅鋳造
幅8.3　奥行5.5　高3.2
M2930（水滴）

上面に「富貴長春」字を鋳出す箱型の枕を象る水滴。対向する角に小さな方形の水口と円形の注口をあける。上面の小口側に鋸歯文を表す。天板を別鋳し、本体と接合する。

176 唐子筆架（からこひっか）

中国・清時代または明治～大正時代　19-20世紀
1個　真鍮鋳造
幅4.2　奥行2.0　高2.5
M2499（古銅唐子文筆架）

這う姿の唐子を象る水滴。背中がやや凹む筆置きとする。蛍光X線分析によりニオブが検出された。無垢。

（箱蓋表）「唐子筆架」

風呂敷に定三の「古銅／唐子筆架」の墨書。

177 鉄地金銀象嵌三味線形文鎮（てつじきんぎんぞうがんしゃみせんがたぶんちん）

江戸～明治時代　19世紀
１個　鉄鍛造　金銀象嵌
総長15.3　竿長11.3　胴幅3.5　胴厚2.1
M2342（鍍金銀象眼三味線形文鎮）

胴は鉄板を組み合わせて作る。竿は無垢。胴の表裏の中央に銀の方形板を嵌め、四方に金銀象嵌で各四文字を象嵌。糸も金で竿に象嵌する。

178 鉄瓶形文鎮（てつびんがたぶんちん）

明治時代　19世紀
1個　鉄鋳造
幅5.9　胴径5.1　高4.8
M2850（鉄ビン型文鎮）

丈の低い鉄瓶を象る無垢鋳鉄の文鎮。把手は別鋳で、山形の座に取り付ける。底はスが顕著に残り、中央に強く削り痕を残す。中央の鋳口を削ったものか。

179 丸太背負唐子香立（まるたせおいからこうだて）

江戸～明治時代　19世紀
1個　銅鋳造　鉄鍛造
幅（丸太）5.9　奥行4.1　総高5.0　人物高4.1
M2251（古銅唐子文鎮線香立）

細い筒状の線香立を造り付けた短い丸太を背負う唐子像。線香立・丸太は鉄板を鍛造し形造る。唐子は銅鋳造（無垢か）。丸太と唐子は鑞付け。唐子は唇を大きく描き表しし頭に低平な髷を表す。上半身裸で、衣服の端は後方へ広がり底面を形造る。外底にも衣文の重なりを鏨彫で表す。

風呂敷に定三の「古銅唐子文鎮線香立」の墨書。

180 銅菊燭台（どうきくしょくだい）

江戸～明治時代　19世紀
1対　銅鍛造
総高69.6　蠟受径10.7　竿径1.9　底径17.1
M2620（銅製燈台 一対）

蠟受と基台を菊花形に象る大型燭台。竿の側面に板を筒状に接合した痕跡あり。竿と基台の間に小刻座を挟む。底板は内側が一段上げ底となる。総体に黄土がかった茶色を呈し、所々黒色を呈する。

（箱蓋表）「宣徳銅／燈臺／金屋五郎三郎（黒円印「金」）」

金屋（金家）五郎三郎は、桃山時代に始まる京都の金工師で、代々同名を襲う。明治に金谷姓を名乗るようになる。本品はそれ以前のものか。

181 銅南蛮人燭台（どうなんばんじんしょくだい）

江戸時代　19世紀
1基　銅鋳造
総高39.3　蠟受径6.1　台幅10.2　台奥行7.6
M1488（小燭台）

足長で帽子を被る南蛮人を象った燭台。蠟受は六葉形。その直下に蕨手を三方に造り出す。南蛮人は顎髭を生やし、ボタン付きの衣服を着る。腰に紐状のベルトを締める。台座は岩を象り、表面には楔状の鏨を詰め打ちし岩肌を表す。台座内には別の金属（鉛か）を流し込み、安定化をはかる。芯鋏と刷毛が添う。

（箱蓋表）「（墨書）三百六十九／（朱書）大聖／（墨書）小燭臺／三四七（朱分銅形印）「松寶」」（箱側面貼紙）「唐人物／燭臺一」「弐八三（朱方印）」（箱底）「文化十四年丑五月／深谷屋／源右衛門」

風呂敷に定三の「古銅／南蛮紅毛人／小燭台」の墨書。

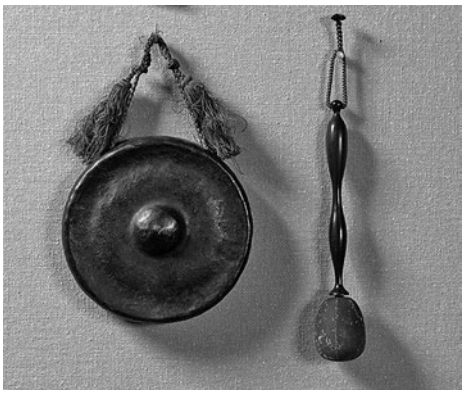
182 銅鑼（どら）

江戸時代　17世紀
1口　銅鍛造
鼓面径36.3　側面厚6.2　口径36.1
M1724（南蛮鉦）

大きく平坦な鼓面と口窄まり気味の胴からなる銅鑼。全面に鎚目を残す。鼓面は一定方向の調整痕を認める。口縁は凹凸が著しい。側面一箇所に孔を二個開け吊紐を通す。木製柄付き絵韋包みの撞木を伴う。

（箱蓋表）「南蠻鉦」（箱蓋裏）「小堀権十郎殿傳来／神尾備前守殿／所持」（箱側面）「遍百廿壱／本願寺傳来／南蠻鉦（朱長円印）」

小堀権十郎は、小堀遠州の三男。幕府旗本で茶人。名は政尹、号は篷雪。1694（元禄７）年没。神尾備前守元勝は、江戸・南町奉行で茶人。1667（寛文７）年没。風呂敷に定三の「本願寺傳来／南蛮鉦」の墨書。



183 銅鑼（どら）

明治時代　19-20世紀
1口　銅鍛造
鼓面径18.0　中央甲径5.0　側面厚3.3　口径18.0
M2618（銅鑼（バチ添））

鼓面中央に小さな甲盛りをつけた銅鑼。鼓面は内側へ向かって一旦くぼみ、中央に向かい僅かに盛り上がりをつける。側面に荒い鎚目を残す。工具による仕上げ痕は認めない。地金は佐波理質。表面にざらつきが多く、黒色の着色を施す。新しい撞木を伴う。

（箱蓋表貼紙）「（朱書）レ印／（墨書）第拾壱番／銅羅／バイ添（朱長円印）」（箱蓋裏）方形焼印「長野横苗」（箱側面貼紙）「（朱書）レ印／（墨書）第拾壱番（朱長円印）」「ドラ　外ニ　ブチ入」

184 猫置物（ねこおきもの）

明治時代　19世紀
1軀　銅鋳造
幅23.5　胴奥行10.1　高11.3
M1445（唐金猫　戸止）

鈴付きの首輪をつけた猫の置物。耳の内側の質感など写実的に表し、蠟型鋳造とみられる。足の裏まで蠟原型を陰刻し表している。臀部の底面に方形の埋金。重量があるが、中子土を掻き出したとみられる。全体に煤状の物質が付着する。

（切紙）「東山時代／唐金猫／戸止／高野山什」（木札）「時代／銅製／猫」「銅製／猫」（箱側面貼紙）「東山時代／唐金／高野山什器（長円印「淡如水」）」

風呂敷に定三の「足利／猫／戸止」の墨書。

185 猫置物（ねこおきもの）

江戸時代　19世紀
1軀　真鍮鋳造
鍍金
幅7.8　奥行3.5　高4.0
M2317（猫）

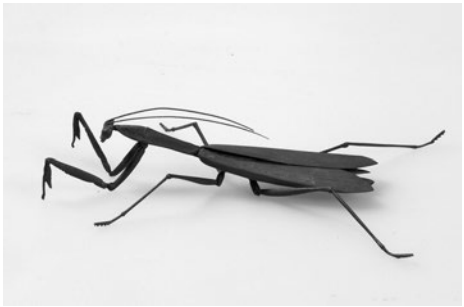
頭を前足につけしゃがむ猫を象る置物。無垢で、足の爪など蠟原型で表す。ごく細かで密な毛ぼりで体毛を表し、斑を墨差しで表す。目鼻も墨差しで表す。

（箱蓋貼紙）「桃山時代／猫」。風呂敷に定三の「桃山時代／猫」の墨書。

186 鉄鼈（てつすっぽん）

明治時代　19世紀
1個　鉄鍛造
縦4.8　横3.9　高1.2
M2842-10

鼈の甲羅と胴を別板で作り、同系の材で接合したとみられる。甲羅は鏨で石目状に表す。目、爪は金象嵌。胴は中ほどに大小の孔（大：長径1.1cm、小：径0.55cm）を開ける。鏨により脚などの線を刻み、全体に格子状の細線を刻んで肌を表す。鉄の胴の表面に白銀色の着色を行うか。



187 鉄蟷螂（てつかまきり）

江戸時代　18-19世紀
１軀　銅鍛造
長8.8
M2316（鉄製蟷螂）

蟷螂の各部分を別々に造り組み合わせて、羽や足を動かせるように造った自在置物。足の関節は極小の軸で繋ぐ。腹下に「信家」の刻銘あり。

（箱蓋表）「拝領品／明珍信家作／奥村家御所蔵」
（箱蓋裏）貼紙に信家の由緒を記す

銘の信家は明珍系の甲冑師とみられるが、室町末期の明珍信家とは別人。風呂敷に定三の「明珍作／蟷螂」の墨書。

188 銅獅子三足瓶掛火鉢（どうしさんそくびんかけひばち）

江戸時代後期　19世紀
1口　銅鋳造
鍔径46.0　底径30.5　高18.7
M1167（古銅鬼面三足瓶掛釜）

幅広の鍔を持つ獣脚付火鉢。鍔の外周上方に覆輪状の隆帯をめぐらす。炉の体部は直線的に上方に広がる。底の中央に径約4.5cmの円形湯口痕を残す。胴の下端に獣形の脚を一鋳で造り出す。獣面は鼻をやや強調し、牙・歯まで表すも、やや平面的な印象を与える。脚先は四爪ながら爪の表現は至って甘い。内面に縦方向のバリを残す。下寄りに木製台に留めるための釘孔を作り出す。地金は暗茶色。外面は黒漆焼き付けとする。

189 鬼面三足瓶掛火鉢（きめんさんそくびんがけひばち）

江戸～明治時代　19世紀
1口　銅鋳造
鍔径46.4　口径35.3　高17.3
M1241（鍍金鬼面三つ足瓶掛）

広い鍔をめぐらす三足火鉢。鍔の外周は覆輪状につくる。三足は大振りな獣脚形。足のみに漆箔を施す。内底に墨書あるも判読不能。

（蓋表）「鎌倉時代／鬼面三足火舎瓶掛」（箱側面）「渡金／鬼面三足／瓶掛／火鉢」

190 台付十能（だいつきじゅうのう）

昭和時代　20世紀
1挺　銅鋳造
総長22・2　口長径11.5　口短径10.3　高8.5
M1566（台付十能）

爐部を半裁した桃型につくる台付十能。柄は木製漆塗り。蕉葉を薄肉に彫り表す。台から立ち上がる受けは銅板製七宝透。十能本体を鋲留めする。

（蓋裏）「台十能」（箱側面）「台十能」

191 キリシタン踏絵（ふみえ）

江戸時代　17世紀
1枚　真鍮鋳造
縦19.0　横13.0　総高3.1　側面高2.3
M1523（切支丹踏絵）

隅丸長方形の板に、キリストを抱くマリア像他の人物を表した踏絵。下方に山岳と連珠表現による十字架を表す。外周は低く立ち上がり、内縁に沿って連珠をめぐらす。全体に高肉に鋳出すが、表面の摩滅が著しい。地には荒い鋳肌を残す。側面の下縁に刳込を入れ、四脚状に造る。長側の中央に径４mmの円孔を開ける。裏面は像の部分が大きくくぼみ、全体に荒い鋳肌を残す。

（箱蓋表）「切支丹踏繪（朱長円印「淡如水」）」（箱蓋裏）「守一鑑／切支丹踏繪」

蓋表は定三、蓋裏は守一による箱書。風呂敷に定三の「切支丹／踏繪」の墨書。

金属工芸 東南アジア・中国大陸・朝鮮半島

192 金銀象眼鉄五鈷杵（きんぎんぞうがんてつごこしょ）

東南アジア　13-15世紀
1口　鉄鋳造　象嵌
全長18.7　把長6.3　中鈷長6.0　鈷張4.2
把中央部径2.0
M947（金銀平象嵌鉄製鬼面五鈷杵）

中鈷が長く突出し、脇鈷が嘴形になる五鈷杵。脇鈷の基部には鬼面を長く表す。把は両脇を単弁八葉の蒙古風蓮弁を連ねる。把中央は、連珠文帯で三区に分かつ。中央帯は、四方に三鈷杵・羯磨等の法具文を鋳出す。その両側は獣面を四方に表す。文様のへこみに金の薄板を埋め込む。把両端の蓮弁内に金と銀とを交互に埋め込む。

193 金銅舎利容器（こんどうしゃりようき）

中国・唐～宋時代または朝鮮半島・新羅～高麗時代
9-11世紀
１口　真鍮鋳造　鍍金
総高9.0　身高6.1　口径4.1　胴径6.9
高台径5.2
M934（金銅舎利容器）

胴を八角形とし、その上下を球胴形として、口頸部に蓋の受けを造り出した舎利容器。受けの上辺に二条の刻線と下側線に刻点を打つ。対称位置に蓋と合わせた通し孔を開ける。肩と腰の各上下にゆるやかな隆帯をめぐらし、複連点文鏨を連ねる。肩には大粒の魚々子を粗く打って、大ぶりな唐草を蹴彫りで表す。胴の八面には種子を双鈎体で表す。種子のみ日本での追刻か。

蓋は単弁八葉の蓮弁を傘状に巡らし、その内側に二条の隆帯をめぐらした座を設け、塔形のつまみを設ける。内側も丁寧に削り出す。蓋のみ日本製の可能性も残る。蛍光Ｘ線分析で、真鍮に鍍金を施したことが確認された。

主要検出元素　銅、亜鉛
他の検出元素　金

194 銅合子（どうごうす）

中国・宋時代　11-12世紀
1合　銅鋳造
総高2.7　身高1.7　口径0.9　底径5.0
胴径6.1
M1121（砂張合子）

響銅質。挽もの仕上げによりごく薄く造る。被せ蓋式の合子で、蓋の天井に三条の圏線をめぐらしてその内外に凹凸をつける。蓋の肩は柔らかく膨らむ。身の胴側面と底の間には面を取る。

195 金銅牡丹唐草文小筒（こんどうぼたんからくさもんしょうづつ）

中国・元～明時代　14-15世紀
１個　銅鍛造　鍍金　鍍銀
総長7.1　身長6.1　径0.9
M995（銀鍍金経筒）

銅板を筒状に造り、表面に極細い毛彫りで牡丹唐草を表す。蓋は槍と思われる軸でつなぐ。蓋側面と筒端側面に同図様の唐草を線刻する。両小口に八弁蓮華文を打ち出す板を嵌める（筒端小口の方が小振り）。蛍光Ｘ線分析により、厚い鍍金を施し、一部に鍍銀を行ったことが確認された。

主要検出元素　銅、金
その他の検出元素：銀、水銀

196 鉄地箔押龍鳳凰文透彫方台（てっちはくおしりゅうほうおうもんすかしぼりほうだい）

中国・明時代　16-17世紀
１基　鉄鍛造
金箔押
縦14.3　横14.2　高2.5
M1449（鉄透彫鍍金唐草文炉台）

鉄板を打ち出し、四隅に花先形の脚を造り出した方形の台。外周に龍を変化させた唐草様の文様を透かし、側面の中央に鳳凰を表す。天板の中央はわずかに凹む。

（蓋裏）「南蛮鉄廬座」他の寄書有

包裂に狻猊盤の由来の書付。

197 銀牛（ぎんうし）

中国・明時代　16-17世紀
1個　銀鍛造
体長13.7　幅4.7　高9.3
M2519（銀製　牛）

銀の板を打ち出して組み合わせた中空の牛。目や角、蹄などを写実的に表す。短刻線を密に打ち体毛を表す。緑青を所々発生し、地金の色見からも銅を含む銀板とみられる。

革製丸菱形の箱に入る。金具に、草葉紋を蹴彫り。一部に魚々子を打つ。

198 騎牛人物香立（きぎゅうじんぶつこうたて）

中国・清時代　17-19世紀
1個　真鍮鋳造　鍍金
幅5.9　奥行3.6　高8.2
M1595（唐物騎牛人物香立）

牛の背に座した仙人と思しい老人像を表した香立。牛を繋ぐ杭を香立とする。牛・人物と香立は別造で表面におだやかな凹凸を表した板に枘留めする。牛・人物は表面に磨きをかけ、薄い金色を呈する。牛の胴の表側三か所に銀を象嵌し、斑を表現する。外形は鋳造で表すも、髭、衣文、牛の首文様などは幅広の鏨で彫り表す。全体に重量があり無垢とみられる。

香立は、高さ2.9㎝、口内径0.25㎝の円筒状で上端近くに一条の刳りをめぐらし、その直下の側面にも孔に達する刳りを入れる。

（蓋表）「唐物　銀象嵌／牛人物　香立」

風呂敷に定三の「唐物／騎牛人物／香立」の墨書。

199 葡萄鳥獣文壺（ぶどうちょうじゅうもんつぼ）

中国・清時代　18-19世紀
１口　銅鍛造
総高16.0　身高13.5　口径4.8　胴径9.9
M2282（鍍銀鳥獣壺）

銀を若干混えた銅板を鎚起して、表面に精緻な彫金で葡萄唐草と鳥獣を表した蓋付壺。頸から肩にかけて耳形の四方耳を鑞付けする。唐銀器を意図した微細な魚々子・毛彫を駆使するが、当初から銀の発色はしていなかったと思われる。

主要検出元素　銅
他の検出元素　銀

200 輪花形茶托（りんかがたちゃたく）

中国・清時代　18-19世紀
5枚1揃　錫鋳造
縦6.9　横12.4　高1.6　底径3.5
M1569（錫木瓜形茶托 5客）

長短の四葉輪花形の茶托。各々の区画は柔らかく曲面を造り出す。見込み外底を中心に鍔にかけて放射状の工具痕を薄く残す。外底に「建隆／年製」と款記を打つ。全体に錫色が黒味を帯び、銀を含む可能性あり。

（蓋表）「底印建隆年製／錫茶托（朱方印）」（箱蓋裏）「癸亥春月其翁鑑并求（朱方印）」

建隆は北宋年号。「建隆年製」の款記を打つ錫茶托は、中国・日本両国で各種形式の作例が知られる。

201 稜花形茶托（りょうかがたちゃたく）

中国・清～民国時代　19-20世紀
5枚1揃　錫鋳造
縦8.9　横14.7　高3.2　底径4.5
M1567（錫木瓜形茶托 5客）

やや深手で大型の稜花形茶托。鋳造後轆轤削りで仕上げた皿を型抜きした機械仕上げとみられる茶托。内外面に削り痕跡を認め、外底にスを認めるものあり。全体にやや黒味を帯びる。外底に「盛永興造」の小さな款記を打つ。

（木札）「唐物／錫茶托」

202 鍍金山岳文華瓶（ときんさんがくもんけびょう）

朝鮮半島・三国時代か　6-7世紀
1口　銅鋳造　鍍金
高13.6　口径3.0　台径4.1
M982（金銅山岳文長頸瓶）

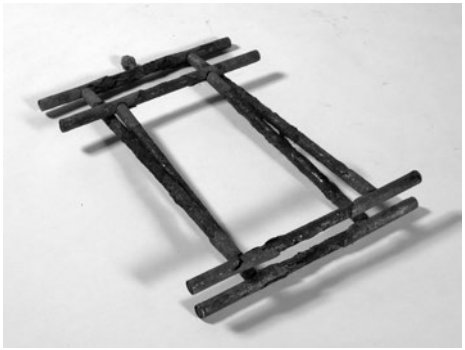
長頸で下膨れ、高い脚台付の華瓶。口縁帯と頸部の隆体、胴に山岳文を線刻した内側を鍍金する。

主要検出元素　銅
他の検出元素　スズ、鉛

203 金銅十三重塔（こんどうじゅうさんとう）

朝鮮半島・新羅～高麗時代　8-10世紀
1塔　銅鋳造　鍍金
高45.5　軸部幅5.4　同奥行5.4
M927（鍍金十三塔）

各層別鋳し、積み上げて接合する。各層の床・天井は存在せず、吹き抜けとなる。軸部は前後に入口を設ける。窓に立て格子を表す。二層目より上は中央に柱を表し、欄間と窓を透かす。屋根は下り棟先が強く反りあがる。頂部には霊獣形の飾りを頂く。全体に土が付着し、その一部の下に鍍金が残る。



204 鉄地金銀象嵌鏡架（てっちきんぎんぞうがんきょうか）

朝鮮半島・高麗時代前期　10-11世紀
１基　鉄鍛造　金銀象嵌
M1027（鉄製交椅）

木村定三コレクション調査報告書３参照

205 銅五鈷鈴（どうごこれい）

朝鮮半島・高麗時代　10-14世紀
１口　銅鋳造
総高20.8　鈴身高8.9　把長11.9
鈷張4.2　口径7.0
M958（銅五鈷杵）

把と鈴身を一体に造り、身に蓮弁を表した五鈷鈴。把は上端以外に蓮弁を表さず鬼目にあたる部分も隆帯のみとする。脇鈷は逆刺を表し、中鈷と一体になる。根元に鬼面を表す。鈴身は単弁五弁の大ぶりな蓮弁を下辺に向かって交互に葺き表す。上段中段の蓮弁の各々に陽刻で梵字を表す。全体に蠟型による鋳造とみられる。蛍光X線分析により、銅・錫・鉛合金の青銅で、ヒ素も含有していると確認された。鈴身が割れており、ハンダで接合している。

主要検出元素：銅
他の検出元素：スズ、鉛、ヒ素

206 金銅蓮華形香炉（こんどうれんげがたこうろ）

朝鮮半島・朝鮮時代　17-18世紀
１個　銅鋳造　鍍金
口径7.7　高8.1　台形9.1
M2312（鍍金銅製蓮華□和台）

炉部は中に花弁を表した大陸風の蓮弁を二段に葺く。敷茄子は素文で瓜形。伏花は和様に近い複弁蓮華座。框座も日本のそれに近い。

207 銅経机（どうきょうつくえ）

朝鮮半島・朝鮮時代か　14-19世紀
１基　銅鋳造
幅48.9　奥行22.6　高22.7
M641（青銅大方広仏華厳経卓）

天板に大方広仏華厳経の見返し絵を版木風に鋳造で表す。筆返しの内面に唐草を印刻表現で鋳出す。天板裏には中央に三尊仏、左右に如意塔、また枠内に獣文を陽鋳する。幕板には太く荒い唐草を陽鋳する。四足はごく細く、上端に下向きの獅子、下端に客先をごく粗い表現で鋳出する。

208 銅虎水滴（どうとらすいてき）

朝鮮半島・朝鮮時代　17-19世紀
1個　銅鋳造
幅4.5　奥行9.4　高6.8
M2500（古銅　牛　水滴）

前足を長く踏ん張り、座った姿勢の虎を象った水滴。背に水口孔（径２mm）、口内に注口（２mm）を開ける。尾は細長く作り、肩近くまで伸びる。全体に細かな擦痕を残す。尻下に孔を有し中子土を取り出した後、別材の銅で閉じた模様。銅材は素銅を用いており、日本へ舶載後水滴に転用され底を閉じた可能性も考え得る。全体に黒漆を塗っていた模様。現状は前面のみ残る。

木製丸櫃形の容器に入る。蓋に朱漆で「時至清風」等の文字と三日月文などを記す。箱も合わせ朝鮮半島より舶載されたものか。

凡例

・本目録は、愛知県美術館所蔵「木村定三コレクション」の中から、金属工芸とその付属品の一部を掲載し、解説を付したものである。但し、鏡については2011（平成23）年発行「木村定三コレクション研究紀要」において目録が公開されているので省いた。また素材が金属であっても、後の考古遺物資料調査報告目録に掲載した方が良いと判断したものは本目録より除外した。
・各作品名は、調査者の見解を勘案して決定した。
・各作品のデータは、掲載番号、作品名、製作年代、技法材料、寸法（cm、染色工芸品に関しては小数点以下を四捨五入した）コレクション番号、受入時名称の順に記載した。
・資料は、まず日本で製作されたと考えられるものを「密教法具」「その他仏教美術」「茶道具」「煎茶道具・文房具・その他」の分野毎に掲載し、東南アジア・中国大陸・朝鮮半島で製作されたと考えられるものを最後に集めた。また各分野の内部も用途別とし、時代順に掲載した。
・箱書の内、判読できなかった文字を□とした。
・作品調査と解説執筆は久保智康氏（京都国立博物館名誉館員、叡山学院教授）が行った。
・蛍光X線分析測定結果は、長屋菜津子が下記の条件で測定したものである。
　範　　囲：直径２mm
　時　　間：300min
　電圧・電流：50Kv、200μA
　装　　置：セイコーインスツルメンツ（株）SEA200

・金属工芸の調査は2005（平成17）年に始まり、愛知県美術館学芸員・古田浩俊、長屋菜津子が引き継ぎを行いながら担当した。久保智康氏以外にも、中野徹氏　阪田宗彦氏　稲垣晋也氏、野澤則幸氏、原田一敏氏、森田稔氏　村上隆氏、服部敦子氏　長久智子氏の助言、協力を得た。
・長期にわたったこの調査では、池田素子、田村明子、中村麻理、村瀬可奈、加藤里英、山口由香、若山満大、足立好弘の調査補助を受けた。

編集　愛知県美術館　長屋菜津子